

## フーコー『言葉と物』におけるコンディヤック (中)

飯 野 和 夫

### II. 第四章 「語ること」

フーコーは、『言葉と物』第三章で展開した表象についての一般的考察を受けて、続く第四章では表象の一形態としての言語の検討へと進む。

#### 1. 言説に対する批判的態度

##### 古典主義時代の言語

第一節「批判 critique と注釈 commentaire」(MC, p. 92-95, J, p. 102-105) では、古典主義時代における言語のあり方と、それらがどのように当時の人による考察の対象となったかが考察される。

古典主義時代において、一方で、思考(想念) *pensée* を表象する言語は至上のものである。ただし、言語を成立させる「意味作用という本質的で原初的な行為があるのではなく<sup>(1)</sup>、ただ単に表象 *représentation* の核心に、表象がもつ自己を表象する *se représenter elle-même* あの能力があるだけである。つまり、反省のまなざしのもとで<sup>(2)</sup>、自己を部分ごとに併置して自己を分析し、自己の延長となる代替物〔諸記号〕の内に自己を委託する能力があるだけなのである」(MC, p. 92, J, p. 102)。人間における表象は「自己を表象する」。その際、表象の作用は、自己の表象世界を諸部分に分割、「併置」して、記号によって「代替」させ、記号の体系として組み立て直すことだろう<sup>(3)</sup>。それは「自己を分析」することでもある。

さて、フーコーはこうした表象から言語に接近する。「表象は、(…) 自らの力で表象固有の空間にむかって開かれており、この空間内部の脈網が意味を生じさせる。(…)〔記号としての〕語は思考〔の内容〕を想起させ、思考を表示するが、それは(…)、他の表象を表象しているあの諸表象すべての合間においてのことである。古典主義時代の言語は、(…) 思考の網目の中にとらえられている。(…) それは(…) 思考それ自体にほかならない」(ibid.)。表象の脈絡が意味を生み、そうした脈絡(意味)の集積が思考なのであろうし、それを明示するのが言語であるということであろう。

他方で、この時代、「言語が表象に対してまったく透明になったため、言語の存在は問題となくなる」(MC, p. 93, J, p. 103)。「ただ表象〔作用〕だけが残り、それはそれを顕現する *manifester* 言語諸記号の中にくりひろげられ、そのことによって〔一定の内容をもつ〕〈言説〉

(1)

となる」(ibid.)。「この言説が今度は別のことば langage の対象となると、(…) 人々はただ、この言説に対して、それがいかに機能しているかを問うだけである」(MC, p. 93-94, J, p. 103-104)。つまり、指示、分析、合成、置換といった機能が問われることだろう。古典主義時代には、言語は表象を「顕現」して言説となるが、言説に対する人々の態度は〈批判〉の態度となった、とされるのである (MC, p. 94, J, p. 104)<sup>(4)</sup>。

このように、批判はまずは言語の表象作用の可視的形態、i. 形式を問うものだが、表象にかかわる以上、「言語の語ること」つまり「ii. 内容 fond」をも問わざるをえないとされる。「批判は言語を〔内容にかかわる〕ii. 真実さ、正確さ (… ) などの用語で分析せざるをえない」(MC, p. 94, J, p. 104)。批判はこうして i. 形式と ii. 内容にかかわることになる。「古典主義時代において、批判は〔i. 形式と ii. 内容に〕分裂することなく、いわば一つの塊として、言語の表象的役割に対しておこなわれた」(ibid.)、とされている<sup>(5)</sup>。

#### 言説に対する批判の4形態

そしてその場合、批判は四つの形態をとった、とフーコーは考える。

1. まず、語の批判である。すなわち、「在来の語彙によって学問や哲学を構築することの不可能性」の指摘、表象のあり方を適切に反映しない「一般的用語」や「抽象的用語の摘発」、「完全に分析的な言語 (… ) を成立させる必要性」の指摘、などである (ibid.)。これは、たとえばコンディヤックが在来の用語法を批判し、厳密な用語体系をもつ「よくできた言語」の創設を主張していたことなどを念頭においていると思われる<sup>(6)</sup>。

2. 次に「文法的次元」における「i. 統辞法や語順や文構造のもつ ii. 表象的価値の分析」である (MC, p. 94, J, p. 104)。これは以下に見るように、「一般文法」の試みの一部をなすであろう。文の構造がもつ意味や価値を一般的に——フーコーの言葉では「表象的価値の分析」という観点から——考察するものである<sup>(7)</sup>。コンディヤックも、パルマ公王子のための『教程』の一部として『文法 Grammaire』(1775)を著したが、二部構成のこの書の第一部が一般文法として、言語活動 langage<sup>(8)</sup>の一般的な諸要素・諸規則を探求している(第二部は、個別言語を扱う「個別文法 grammaire particulière」(G, I-IV, p. 73 [OP1, p. 443a])として、フランス語における文法的諸規則を具体的に検証している)。

3. 批判はまた、「修辞学上の諸形式」を検討する。「修辞上の〈型(フィギュール)〉の分析、つまり、言説の種々のタイプとそのそれぞれの表現的価値の分析 (… ) がそれである」(MC, p. 94-95, J, p. 105)。実際、古典主義時代には修辞学が盛んであり、コンディヤックが同じく『教程』の一部として執筆した大部の『書く技術 Art d'écrire』は修辞学を扱っていた。ただし、フーコーは修辞学には踏み込まず、コンディヤックのこの著作にもふれていない。

4. 最後に、「批判は、既存の書かれた言語 langage に対して、i. 言語とそれが表象している ii. ものとの関係を規定しようとする」(MC, p. 95, J, p. 105)。17世紀以降の宗教上の原典の批判的な釈義 exégèse がこれで、対象となる言説が「いかなる ii. 真実〔真理〕 vérité を伝え

るためだったのか」(ibid.)をあきらかにするとされる<sup>(9)</sup>。フーコーはこの釈義にも踏み込まず、一方、コンディヤックの著作にもこの釈義に相当するものはない。

さて、フーコーは上の四形態の内、主に2. 一般文法を検討することになるが、それとの関連で、1. 「よくできた言語」の理想にも折にふれて言及されることになろう。

## 2. 一般文法

### 言語の特徴

フーコーによれば、ルネサンス期には事物としての「言語の实在」が想定されていたのだが、古典主義時代にはもはやそうした実在は想定されず、問われるのは「表象作用における言語のはたらき、つまり言語の〈言説〉としての性格および効力」(MC, p. 95-96, J, p. 106)となる<sup>(1)</sup>。こうしてフーコーは問う。「言語記号に、他のあらゆる記号よりもよく表象を表示し分析し再構成することを可能にする、あの不思議な力とは何なのか」(MC, p. 96, J, p. 106)、と。

フーコーによれば、表象作用において言語は決定的役割を演じるが、それは言語の特徴に由来する。すなわち、「言語は思考全体を一挙に表象することができず、それを線状の〔継起的な〕秩序に沿って部分ごとに配置せざるをえない。(…)この〔線状の〕秩序は表象〔の本来のあり方〕とは無縁である。たしかに、さまざまな思考 *pensées* は時間の内で継起するが、(…)一つ一つ〔の思考〕は〔意識に対して〕ある統一体を形成している」(ibid.)。「このように自らの上に凝縮された諸表象」を、言語は「命題の内に展開」するのである(ibid.)。こうして、フーコーは古典主義時代の言語を論じるに当たって、言語が表象を「継起的 *successif* 秩序にしたがって分析する」(ibid.)という理解を前提として立てる。フーコーの立場と方法は思想史家のそれであり、この理解も当時の論者たちの議論から引き出されたようだ。実際、この箇所では、コンディヤック、デステュットほかの論者たちが引かれている。

コンディヤックについては、「一つの思考が統一体である」ということに関連して、本文中で言及され、引用もされている。フーコーは、コンディヤックが、『文法』中のあるくぐり、「一つの表象〔思考〕のすべての要素は一瞬の内にあたえられ、反省のみがそれらをひとつずつ展開することができる」と指摘する(ibid.)。ここでは、反省自体が継起的であると見なされている。指示された箇所ではコンディヤックは実際には次のように語っている。「諸対象を判明な仕方では知覚する *apercevoir* には、あなたの目にすべて同時に生じるこれら諸感覚〔=表象の諸要素〕を一つ一つ観察する必要がある」(G, [I-III] p. 40 [OP1, p. 435b])<sup>(2)(3)</sup>。

フーコーはふれないものの、実は、コンディヤックは『文法』第一部において、人間の言語活動の「継起的」性格について数多く言及している。たとえば、統一体である思考と継起的な人為的言語とが対比される。「個々の思考は必ず〔諸観念から〕複合されているから、同時的諸観念にもとづく言語 *langage des idées simultanées* が唯一の自然的言語 *langage naturel*<sup>(4)</sup>であることになる。それに対して、継起的諸観念にもとづく言語 *langage des idées successives* は、そ

の初めから技法 art なのであり、完成へと至れば偉大な技法となるのである」(G, I-I, p. 15 [OP1, p. 430a])。

次の箇所では、言語と「分析」が密接に関係することも語られている。「諸言語は分析をするにつれて完全になる。いくつもの不明瞭なかたまりを同時に提供するのではなく、諸言語は継起的に諸観念を提示し、秩序立って配列し、さまざまなクラスに編成する。諸言語は思考の諸要素をいわばあやつり、無数の仕方でも組み合わせる」(G, I-II p. 36-37 [OP1, p. 435a])。

このように、フーコーが言語を論じる際に前提とする、言語が継起的であるという理解にも、コンディヤックが影響を与えている可能性は大きい。さて、フーコーは続ける。「ここ〔継起的秩序〕に言語固有のものがあるわけで、これこそ言語を、表象(言語はその表象をさらに表象するものにほかならないのだが)からも、他の種類の記号(…)からも、区別するものにほかならない。言語は、(…)ただ、継起的なものが同時的なものに対立する仕方でも、それらすべてに対立している。(…)言語は、さまざまな部分(または量)の同時的比較〔=一つの思考〕に対して、段階を逐次的に追わなければならない一つの秩序を置き換える。言語は、こうした厳密な意味において、思考の〈分析〉なのである」(MC, p. 97, J, p. 107)。

フーコーによれば、「古典主義時代が『一般文法』と呼んだ新たな認識論的領域は、まさしくここに位置している。(…)〈一般文法〉とは、〈表象されるべき同時的なものとの関係における、言語上の秩序の研究〉である。一般文法の固有の対象は(…)〈言説〉なのだ」(ibid.)。

### 一般文法の役割

フーコーは言語の機能の考察を進める。言語は単に伝達のためのものなのではない。「〔言語は〕表象と反省とを結ぶ具体的紐帯である。それは、人間相互が通じあうための道具であるよりも、表象が反省と通じあうためどうしても通らなければならない道なのだ」(MC, p. 98, J, p. 108)。この点についても、コンディヤックが、言葉づかいはやや異なるが同様のことを語っている。「言語の第一の目的は思考 *pensée* を分析することである。実際、私たちの精神において共存している諸観念を継的に他人に示すことができるのは、それらの観念を自分に継的に示すことができる限りにおいてである。(…)諸言語は私たちが互いに思考 *pensées* を伝えるためにだけ役立つと考えるならば間違いであろう」(G, I-VI, p. 67 [OP1, p. 442a])。

ここで、両者における思考と反省の概念を整理しよう。『言葉と物』のフーコーにおいて、思考は諸表象・諸観念の関係づけられた集積であろうが(本論文 p. 1)、「一つ一つの思考はある統一体を形成」し、その思考が「さまざまな部分(または量)の同時的比較」をおこなうと読むことができた(本頁上段)。他方、フーコーにおいて、反省は、継起的な言語をあやつって、思考を継起的な秩序に移す精神の(分析的な)働き、と理解されていたと思われる(p. 3)。一方、コンディヤックにおいても思考は同時的であるのに対して、人為的言語は継起的である(p. 3)。『文法』においては反省は特に論じられないが、『人間知識起源論』では重視されており、フーコーと同様、継起的な言語をあやつって思考を分析する働きであろう。

さて、フーコーは、今し方引用した箇所が続く部分で、「一般文法」について新たに次のように語っている。「〈一般文法〉（…）は、学問の自然発生的形態 *forme spontanée*、つまり精神の未制御の論理 *logique incontrôlée* のようなもの（原注 G, [Objet de cet ouvrage] p. 4-5, [I-VI] p. 67-73）であると同時に、思考の最初の反省的分解、つまり、直接的なもののもっとも原初的な断絶の一つにほかならない」（MC, p. 98, J, p. 108）。

フーコーはここで原注を付けてコンディヤックの『文法』の参照を指示しているが、より詳しく展開される後の方の参照箇所をまず見よう。『文法』第6章の該当箇所での展開によれば、思考の分析の方法は言語なのである。言語が当初の不完全な状態から完全性を高めて、「〔事物に対応した〕諸観念の生成をわかりやすく示す」ようになることが、「思考の分析」となるのである（G, I-VI, p. 69, 70 [OP1, p. 442a, 442b]）。「この分析的方法の諸原理と諸規則を〔私たちに〕教える学問が『文法』と呼ばれる。この〔分析的〕方法があらゆる言語に与える諸規則を学問が教えるなら、その学問は『一般文法』と呼ばれる。この方法が個々の言語においてしたがう諸規則を教えるなら、その学問は『個別文法』と呼ばれる」（G, I-VI, p. 72-73 [OP1, p. 443a]）。なお、厳密な言語を推奨するコンディヤックだが、この箇所の展開では、「方法」の語と概念はやや明瞭さを欠いている。

一方、同じ原注の前の方の参照箇所では、コンディヤックは総括的に次のように語っている。「〔『文法』の〕第一部では、思考を分析するために諸言語が私たちにもたらず諸記号を探求する。それが一般文法であって、それによって私たちは言語活動の諸要素と、あらゆる言語 *langues* に共通な諸規則とを発見することだろう」（G, [Objet de cet ouvrage] p. 4-5 [OP1, p. 427b]）。

さて、フーコーは先の引用箇所続けて、一般文法の目指すところを語っている。「それ〔一般文法〕は、（…）かくも多様な選択の背後に〈表象の必然的で明証的な秩序〉を再発見するため、あらゆる哲学がふたたび問題にしなければならないものである」（MC, p. 98, J, p. 108）。先のフーコーからの引用の後半で、一般文法は「思考の最初の反省的分解」とされていた。人間の表象作用の集積としての思考は、それ自体、思考あるいはむしろその継起的形態としての反省の対象となり、そこに分析が成立する。一方、「あらゆる反省の最初の形式」（*ibid.*）が言語なのであり、その言語の諸原理を「〈一般文法〉が対象とする」（*ibid.*）のである。ここでは、いまだ一般文法が明確な像を結ばないかもしれないが、フーコーはこれから一般文法の内部へと立ち入っていくことになる。

### 一般文法のいくつかの帰結

以上の一般文法の全般的分析を前提に、各論に入る前の段階ではあるが、フーコーはここで「ただちにいくつかの帰結を引きだ」そうとする。

#### i. 修辞学と文法

第一の帰結として、古典主義時代における言語の諸学 *sciences du langage* は二つに分割され

ていることがあきらかとなる。フーコーによれば、

1. 「一方に〈修辞学〉があって」、「言語の使用とともに生じる表象の空間性を」〈型（フィギュール）〉や〈比喩（トロープ）〉として「規定する」（MC, p. 98, J, p. 108）。2. 「他方に〈文法〉があって、〔言語の〕分節化 articulation と秩序を扱う、つまり、表象の分析が一つの継起的系列にしたがって配列される仕方を扱う」（ibid.）。「〈文法〉は、それぞれの言語について、この〔表象の〕1. 空間性を2. 時間の内に分布させる秩序を規定する」（ibid.）。修辞学と文法（とりわけ一般文法）については、すでに本論文 p. 2で、批判の四形態の3番目と2番目としてふれられていた。今ここでは、修辞学が体现する表象の空間を分析する際、まず空間性を言語を分節化しつつ分析し、それを継起的な秩序として配列する、とされるようだ。なお、分節化については、本節（「2. 一般文法」）の末尾でもふれられる。

## ii. 普遍的言語と普遍的言説

フーコーによれば、〈文法〉はさらに、「言語一般に関する反省として、言語と普遍性の関係をあきらかにする」（MC, p. 98, J, p. 108-109）。この関係は、1. 〈普遍的言語 Langue universelle〉か2. 〈普遍的言説 Discours universel〉の二つの形態をとりうる（ibid.）。

1. 普遍的言語とは、「各表象とそれを構成する各要素に、それらの一義的標識となりうる記号を与えられるような」言語である（MC, p. 98-99, J, p. 109）。この言語は「可能な限りのすべての秩序を通覧する力をもつだろう」。それは〈特徴記述 Caractéristique〉であり、かつ〈結合法 Combinatoire〉でもあり、「考えるあらゆる秩序がその居場所を見いだすべき諸記号、統辞法、文法を案出する」（ibid.）。この普遍的言語は、コンディヤックが「よくできた言語」と呼んだ理想的な言語と同様なものを指すと思われる。「よくできた言語」については、本論文 p. 2で、批判の4形態の第1番目としてもふれられていた。

2. 他方、〈普遍的言説〉は「もっとも単純な表象からもっとも精緻な分析、もっとも複雑な〔記号・観念の〕組みあわせにいたる、精神の自然で必然的な歩みを規定する可能性である」（MC, p. 99, J, p. 109）。この言説は、「認識相互の線状で普遍的な自然の紐帯を浮き彫りにする。（…）それこそが〈観念学〉であり、すなわち認識の自然発生的脈絡をその全長にわたってなぞる redoubler 言語なのである」（ibid.）。この普遍的言説とは、本論文（上）ですでにふれた、人間の認識を跡づける生成論であろう（上編 p. 26以下を参照）。フーコーは言及していないが、本論文 p. 5で紹介したコンディヤック『文法』第6章では、「〔事物に対応した〕諸観念の生成をわかりやすく示す」ことが、思考の分析ともなるとされていた。また何よりも、人間の認識の生成を跡づけたコンディヤック『人間知識起源論 *Essai sur l'origine des connaissances humaines*』（1746）第一篇第二部自体が、一つの普遍的言説であると考えることができよう<sup>(5)</sup>。

なお、1. 普遍的言語との関係について言えば、この2. 普遍的言説によって「精神の（…）歩み」（ibid.）をたどった先に「もっとも精緻な分析、最も複雑な組み合わせ」が可能となり、1. 普遍的言語が実現するのではなかろうか。結局、フーコーが言語と普遍性との関係の二形

態であるとする 1. 普遍的言語と 2. 普遍的言説は、二つながらコンディヤックの思想の内に認められるのである。

フーコーは続ける。1. 普遍的言語（これは〈普遍的特徴記述 *Caractéristique universelle*〉ともされる）と 2. 観念学とは、「1. 言語一般（それは、あらゆる可能な秩序を唯一の基本的表の同時性の中に展開する）の普遍性と、2. 網羅的言説 *un discours exhaustif*（それは、連鎖関係にある可能な認識の一つ一つに対して、唯一で有効な生成過程を再構成する）の普遍性」のように対照関係にある（MC, p. 99, J, p. 110）。そして、フーコーによれば、1, 2. 両者の「共通の可能性」は、古典主義時代に言語に認められていた能力、すなわち「あらゆる表象に正確な記号を与え、表象相互のあいだに、1, 2. 可能なすべての結合関係 *liens* を設定する能力」（MC, p. 99-100, J, p. 110）の内に宿っている<sup>(6)</sup>。ここで諸表象の「可能なすべての結合関係」とは、1. 同時的空間的な諸関係と、2. 諸表象の生成過程における諸関係であろう。結局、「表象は、言語の媒介があってはじめて普遍的なものとの関係をもつ」（MC, p. 100-101, J, p. 111）と云うるのである。

### iii. 認識と言語活動

フーコーによれば、認識 *connaissance* と言語活動 *langage* は「表象の内に同一の起源と同一の機能原理をもつ」（MC, p. 101, J, p. 111）。「一般的な形態においては、認識することも語ることも、まず 1. 表象の同時的なもの *simultané* [=空間性] を分析し、表象の諸要素を識別し、それらの要素を組み合わせている諸関係や、2. そうした諸関係を展開しうる継起的秩序 *successions* を立証することである」（*ibid.*）。

しかし、フーコーは限定を加えて言う。「けれども言語〔のふつうのあり方〕は、認識であるにしても非反省的な認識にすぎない。それは外部から個人に押しつけられる。（…）これに対して〔反省的〕認識は、一つ一つの語が吟味され、一つ一つの関係が確認された一個の言語ともいうべきものである。知るとは、正しく語ること、精神の確実な動きが指定するとおりに語ることである。（…）〔認識ないしは知に基づく〕学問はよくできた言語である」（*ibid.*）。「よくできた言語」については本論文ですでに何度か言及したが、『言葉と物』第四章でフーコー自身が言及するのは初めてである。フーコーは続ける。「だから、すべての言語は作り直されなければならない。つまりそれら〔すべての言語〕は、（…）あの分析的秩序から出発して説明され判断されなければならない、さらに、場合によっては、認識の連鎖が陰影も欠落もなく明晰に表れるように、調整し直されなければならない」（*ibid.*）。

フーコーは続ける。「こうして文法は、その本性そのものによって規制的となる。それは、（…）語ることの根源的可能性を表象の秩序づけ *mise en ordre* に依拠させるのだから。やがてデステュット・ド・トラシは、18世紀の最良の部類の論理学書が文法家たちによって書かれたことに目することになるだろう。つまり、文法の規制は、（…）分析的なものだったのである」（MC, p. 101, J, p. 111-112）。ここでデステュットについて語られていることに典拠の指示はな

く、事実は確認できない<sup>(7)</sup>。一方、コンディヤックは『文法』を著し(1775)、少し後に『論理学』も著している(1780)。この『論理学』は、私たちが論理学と聞いて思い浮かべるものとは趣を異にし、分析の道具である言語の改良を通じた真理の探究を唱えて、高く評価された。その意味では、「十八世紀の再良の部類の論理学書が文法家たちによって書かれた」という指摘は、コンディヤックにも当てはまると言えよう。

こうして「言語は知に依存し、(…)認識によって改良されていく。(…)真の観念は言語の内に、偶然の力だけでは生じえぬ秩序の消しがたい標識を残す。さまざまな文明や民族が思考の遺跡として私たちに残してくれたものは、テキストよりも語彙や統辞法、実際に発せられた言葉よりもむしろ言語を構成する音韻(…)なのだ」(MC, p. 101-102, J, p. 112)<sup>(8)</sup>。

フーコーはこの項での議論を総括し、古典主義時代に生じた「公共性」へと議論を接続している。「古典主義時代においては(…)、知にとっても言語にとっても、表象に記号を与え、その記号によって表象を必然的で可視的な秩序に展開することが問題なのだ。(…)語ること、明らかにすること、知ることは、語の厳密な意味で〈同じ秩序(=次元)〉に属する。(…)学問の論争の公開性、学問のきわめて非秘教的な性格、その素人に対する門戸開放、(…)これらすべての現象の生じうる条件、それはここ、知と言語とのこの相互依存関係の内にある」(MC, p. 103, J, p. 113-114)<sup>(9)</sup>。

#### iv. 時間

「言語が分析となり秩序となったため、言語は2. 時間とのあいだに、それまでにはなかった関係をとり結ぶことになる。(…)言語は、それ自身が法則を規定する2. 継起関係にしたがって *selon une succession*、表象と語を展開する。(…)時間は言語にとって分析の内的な様態なのである」(MC, p. 104, J, p. 114)<sup>(10)</sup>。

こうして、言語をあやつる主体にとって、時間はまず内的に経験されるものである。一方、継起関係の法則は言語自身によって規定されるという。この継起関係の法則が言語ごとに成立する事情が、以下の部分で問題にされているのではあるまいか。「[名詞・形容詞の] 曲用(…)の使用を指定するのは、<表象の分析としての秩序、表象の2. 継起的な直列化 *alignement successif* としての秩序>なのである。『想像力と関心』の秩序にしたがう言語では、語の位置は一定せず、語の機能は屈折〔曲用と活用〕によって示さなければならない(これが『語順転換の自由な』言語である)。これとは逆に、反省の画一的秩序にしたがう言語では、(…)分析的秩序づけの中での〔語の〕位置そのものが、言語が機能する上での価値をもつ。これが『[分析と] 類比的である』言語である」(MC, p. 104-105, J, p. 115)。

フーコーが言うには、「[言語の] もっとも自然発生的な秩序(心像と情念の秩序)が、もっとも反省的な秩序(論理の秩序)に先行したはず」(MC, p. 105, J, p. 115)であると考えられたが、それは、「秩序の内的形態」によって外的な年代が指図されたということである<sup>(11)</sup>。かくして、「時間は言語に内在するものとなった」のであり( *ibid.* )、「言語にとって積極的な時

間」は「語の秩序づけの内に（…）求められなければならない」（MC, p. 105, J, p. 116）とされる。

### 一般文法の認識論的な場

一般文法は「十七世紀後半に現れ、次の世紀の末葉に消滅した」（MC, p. 105-106, J, p. 116）のだが、今やその認識論的な場を規定できよう。フーコーは言う。「一般文法が一般的であるのは、それが、文法的諸規則の下に、（…）言説の表象的機能を明らかにしようとする限りにおいてである。この表象的機能は、表象されている事物を指示する垂直方向の機能であったり、言説を思考と同一の様態にもとづいて連結する *lier* 水平方向の機能であったりする。一般文法が言語を、＜別の表象を分節する *articuler* 表象＞として出現させる以上、一般文法は『一般的』と呼ばれる正当な権利をもつ。それが扱うのは、＜表象の内部における表象の二重化 *dédoublement*＞だからである」（MC, p. 106, J, p. 116）<sup>(12)</sup>。

さて、具体的には、「一般文法は、他の語との関係における語の表象機能を研究しなければならない。というのも、言説が自己の各部分」——すなわち語——「を連結する仕方は、表象が自らの各要素を連結する仕方と同様であるのだから」（MC, p. 106, J, p. 116-117）。続けてフーコーは一般文法の理論構成を分析する。こうした研究のためには、「まず(1) 語と語とを結びつける紐帯 *lien* の分析（命題の理論、とりわけ動詞の理論）、ついで、(2) 語の種々のタイプの分析、語が表象を裁断する仕方、互いに区別される仕方の分析（分節化の理論）が前提とされるであろう。けれども他方、言説がたんなる表象的総体ではなく、二重化された表象であって、もう一つの表象——それ〔二重化された表象〕が表象している〔事物の〕表象自体——を指示する以上、一般文法は、(3) 語がその語るもの *ce que les mots disent* を指示する仕方を、まず語の原初的価値において研究し（起源と語根の理論）、ついで、(4) 語がつねにもつすべり<sup>(13)</sup>、意味拡張、再組織の能力において研究しなければならない（〔語の置き換えによる〕修辭的空間と〔意味の〕派生の理論）」（MC, p. 106-107, J, p. 117）。

では、一般文法の各部分についてフーコーが語るところを見ていくことにしよう。

## 3. 一般文法の検討

### (1) 動詞の理論

#### 表象の實在的関係の肯定

命題は「言語のもっとも一般的でもっとも基本的な形式」である。「命題を分解するやいなや、もはやそこに言説はない。（…）〔語だけが発せられる場合も〕語を叫びや騒音以上のものとして立てるのは、語の中に隠されている命題なのだ」（MC, p. 107, J, p. 117）。「いいえ」（*non*）と言う場合、「命題全体」を凝縮させている、とデステュットも指摘しているという（MC, p. 107-108, J, p. 118）。フーコーは命題の考察に踏み込んでいく。

「命題においては、言語のすべての機能が、命題を形成するのに不可欠なわずか三つの要素

に還元される。主辞 *sujet*、属辞 *attribut*、そして両者の紐帯 *lien*〔動詞〕である<sup>(1)</sup>。(…) 動詞はあらゆる言説の不可欠の条件である。(…) 名詞だけの命題はすべて目に見えぬ動詞を隠している (…)。言語の発端は、動詞の出現するところにある。(…) 動詞は、(…) 他の語のように被制辞や一致の法則にしたがうありふれた語であると同時に、他のすべての語よりも奥まったところ、語られたものの領域ではなく、人がそこから語る領域に位置している。それは (…)、語られたものと自らを語るものとの縫い目、まさに記号が言語となりつつあるその場所におかれているのだ」(MC, p. 108, J, p. 118–119)。

この「語る」こととは「肯定する」ことである。「動詞は〈肯定する *affirmer*〉。すなわち、動詞は、『〔動詞が含まれる〕言説が、(…) 判断を加えている人間の言説であること』〔原注〕を示している」(MC, p. 109, J, p. 119)。原注にあるとおり、フーコーは『ポール・ロワイヤル論理学』から引用している<sup>(2)</sup>。本論文(上)で見たように、『ポール・ロワイヤル論理学』は記号の本質を表象作用に見、この作用をフーコーは『言葉と物』における記号の分析の出発点に据えた。『ポール・ロワイヤル言語学』はさらに、動詞が命題——そして言説——を成立させるという点においても、フーコーの考え方を支えていることになる。

フーコーは続けて言う。「二つの事物のあいだに帰属関係 *lien d'attribution* が肯定されるとき、つまり、AはBで〈ある〉というとき、そこに命題——そして言説——が生じるのだ〔原注 G, [I–XI] p. 115〕」(ibid.)。ここでフーコーは原注を立ててコンディヤック『文法』第1部第11章 p. 115の参照を指示している。第11章「命題の分析」で、コンディヤックは大意次のように展開する (G, I–XI, p. 114–115 [OP1, p. 452b])。言説は命題に分けられる。命題は判断の表現であり、基本的に三つの語からなる。比較すべき二つの観念の記号となる二語と、これらの〈観念の関係を判断する精神の働きの記号となる〉第三の語である。つまり、順に主語 *sujet* あるいは名詞 *nom*、属辞 *attribut*、〔「ある」という〕動詞 *verbe* である。「私は話す *Je parle*」は〔三語からなる〕「私は話しているのである *Je suis parlant*<sup>(3)</sup>」と等価なのである。こうして、コンディヤックが動詞の働きを〈観念の関係の判断の表示〉としているところを、フーコーは「帰属関係の肯定」と読んでいることになる。

フーコーは続ける。「すべての動詞は〈ある〉を意味する唯一の動詞に帰着する。他のすべての動詞もひそかにこの唯一の機能を使用するが、種々の限定によってそれを覆いかくしている<sup>(4)</sup>。(…) 『ただ一つ〈ある〉という動詞だけが……その純粋性を保持している』〔原注〕。言語の本質はすべて、この独異な語の内に集約される」(MC, p. 109, J, p. 119–120)。フーコーはここでも『ポール・ロワイヤル論理学』から引用している。原注では、まず引用元が『論理学』p. 107と示され、さらに「コンディヤック『文法』p. 132–134をも参照のこと」とされている。『文法』の参照を指示されるページは、第1部第13章「〔前章の「命題の項の分析」という題材と〕同じ題材の続き、すなわち動詞の分析」の一部に当たる。

この章でコンディヤックは大意次のように展開している (G, [I–XIII] p. 131–133 [OP1,

p. 456a-b])。主辞と属辞の関係を知覚の次元において判断することもあるが、主辞と属辞の関係は事物の観念の次元で判断することができる。観念によって、私たちは事物を知覚から独立して実在する *existant* ものとして表象する *représenter*。このとき判断は、主辞と属辞の関係を知覚するだけでなく、この関係が実在していることを肯定している。属辞が主辞の中に実在することを肯定している。「である *être*」という動詞がこの肯定を表す。つまり、属辞と主辞の共-実在〔同時的-実在〕*co-existence* を表す。事物は少なくとも私たちの精神の中で実在しているのであり、この実在が表されるのである。動詞が共-実在を肯定するとき、命題は肯定的となる。共-実在していないことを動詞が肯定するとき、命題は否定的となる。これは動詞を否定形にして表す。——用語の使い方に分かりにくい点はあるが、コンディヤックはこのように語っている。

このようにコンディヤックは実在にふれたが、これを受けるかのように、フーコーは、議論を「存在 *être*」へと向ける (以下、i.、ii. の記号及びアンダーラインは筆者が補った)。

「古典主義時代において、(…) i. 言語が ii. 存在 *être* を言表しそれにふれる *rejoindre* のは、ただ〔である *être* という〕一つの語を介してのことである。(…) i. この一語がみずからのみの力であらゆる可能な i. 言説をあらかじめ支えて (…)  
ii. 存在を指示するのである。(…) それ〔この一語〕は (…)  
言語が語っていることをその当の言語が肯定できるようにして、言語が真偽を受容できるようにする。(…) 他の諸記号は、指示するもの *ce qu'ils désignent* に合致しているかどうかは問題となっても、けっして真でも偽でもない。記号によって示されるもの *ce qui est signifié* の ii. 存在へ向って記号の体系をまたぎ越えるこの〔である *être* という〕一語の独異な力により、言語は徹頭徹尾〈言説〉となるのにほかならない」(MC, p. 109-110, J, p. 120)。

「存在」とは何であるのか結論を急がず、少し先のフーコーの記述を追おう。「ii. 観念を肯定することが、この動詞によって保証されている、というべきだろう。しかし、ii. 一つの観念を肯定するとは、その実在 *existence* を言表することであろうか? (…)  
コンディヤックは、実在を諸事物から奪うことができる (…)  
こと、動詞は実在ばかりでなく死をも肯定できることを指摘した」(MC, p. 110, J, p. 120-121)。

まず引用の前半だが、フーコーが「その実在」としているものは、直接には「ある観念の実在」のことだが、コンディヤックについて上で見たように、「観念によって、私たちは事物を知覚から独立して実在するものとして表象する *représenter*」のであるし、「事物は少なくとも私たちの精神の中で実在している」のであった (本頁上段)。フーコーが「ある観念の実在」を問うときには、コンディヤックとともにこのような観念と事物の関係を前提とし、「諸事物の実在」も射程に入れているのではないか。実際、フーコーは一つ前の引用では、「記号によって示されるものの存在」を問題にしていた。結局、〈表象〉というフーコーの用語を借りれば、〈表象 (の働き) が実在している〉のであり、表象の実在 (存在) が「である」という

動詞によって肯定される、ということではなからうか。

一方、引用の後半においてフーコーが、「コンディヤックは、実在を諸事物から奪うことができる(…)こと、動詞は実在ばかりでなく死をも肯定できることを指摘した」とするのは、コンディヤックのどの記述を指しているのかははっきりしないが、上に見たように、コンディヤックが「事物が共-実在していないことを動詞が肯定しうる」と論じたことに対応している可能性が高い(本論文 p. 11)。結局、フーコーは続けて次のように語る。

「[コンディヤックによれば] 動詞が肯定する唯一のものは、ii. 二つの表象が共に実在すること *coexistence* にほかならない。たとえば緑色と樹木、人間と実在または死といった表象が共に実在すること。だからこそ、動詞の時制は、事物が絶対的に実在した時を示すのではなく、事物同士の後関係や同時性の相対的体系を示すのである(原注 G, [II-VIII] p. 185-186 [OP1, p. 469a-b])」(MC, p. 110, J, p. 121)。ここで、フーコー自身が、問題となるのは「表象」の実在(あるいは同時的な実在)であることを認めている。なお、この引用の最後の部分の内容は、原注で指示されるとおり、コンディヤックの『文法』第二部第八章「時制」における考察に対応しよう<sup>(5)</sup>。

さて、少し先でフーコーは言う。「こうしたわけで、i. 〈ある〉という動詞は、みずからの指示する ii. 表象に、あらゆる i. 言語〔の機能〕*langage* を関係づけることを本質的機能としていることになる。i. それ〔〈ある〉という動詞〕が諸記号をはみ出して向かう ii. 存在は、まさしく ii. 思考というものの存在にほかならない」(ibid.)。ここで、これまでに言及された存在が、「思考」〔=表象〕の存在であることが再確認される。なお、すでに明らかであろうが、コンディヤックは「実在」という用語のみを用い、フーコーは「存在」と「実在」に本質的な差を認めていない。さて、思考の存在はまた、思考し「判断を加えている人間」(『ポール・ロワイヤル論理学』、本論文 p. 10 参照)の存在に通じる。そして、思考の存在を介して、指示される諸事物も存在(実在)するかのように語られるのである。

フーコーはすぐ続ける。「十八世紀末のある文法家は、言語を一枚の絵に見たてて、名詞を〔物の〕形、形容詞を色、動詞を形や色がそのうえに現れる画布そのものと規定している。この画布は、(…)言語にその絵画を展開する場を提供するのだ」(ibid.)。〈ある〉という動詞は、表象あるいは思考に存在(実在)を、あるいはむしろ存在(実在)する場を、確保するであろう。この動詞は新たな表象関係を存在させる。このことはまた、表象を真実と虚偽の判断の対象とすることでもあろう<sup>(6)</sup>。

フーコーは続ける。「動詞が指示するのは、結局のところ、i. 言語の ii. 表象的性格、言語が ii. 思考 *pensée* の内に場所を占めるという事実、であり、また、記号の限界を越え、記号を ii. 真実の内に基礎づける i. 唯一の語〔〈ある〉という動詞〕も ii. 表象それ自体にしか到達しない、という事実なのである」(MC, p. 110-111, J, p. 121)。コンディヤックはその『人間知識起源論』(1746)の本論を次のようにはじめていた。「比喩的に言って私たちが天に昇ろう

とも深みに下ろうとも、私たちは自分自身の外には決して出ることがない。私たちが知覚するのは、私たちがもつ想念〔思考〕 *pensée* 以外のなにもでもないのである<sup>(7)</sup>。フーコーの記述は、このコンディヤックの記述と響き合うように感じられる。私たちは知覚の表象世界に、言語の表象作用を重ねていくが、私たちが直接関与しうるのは、結局は想念(思考)あるいは表象の範囲にとどまるのである。ただし、このことは外界の存在を否定することにはつながるまい。確かに、動詞が存在させるものは表象だけであろう。しかし、表象はあくまでも<想念の外部にあるもの>をモデルにして成立しているものであり、新たな表象を存在させることも、<外部にあるもの>に対応した新たな深化した認識を成立させることであろう。

フーコーは続ける。「こうしたわけで、i. 動詞の機能は、言語の ii. 実在のあり方 *mode d'existence* と同一視される。動詞の機能は言語の実在のあり方を全体にわたって貫いているのである。i. 語ること、それは、諸記号によって ii. 表象することであり、かつ動詞によって統御される *commandé(e)* ii. 総合形式を諸記号に与えることなのだ。(…) 動詞とは ii. 帰属関係の定立 *attribution* である。すなわち、すべての属辞の支えであり形式である」(MC, p. 111, J, p. 121)。こうして、動詞が表象関係を統御しつつ存在させることになるのである。

### 哲学的背景の解体へ

しかし、フーコーによれば、こうした動詞の重要な機能は歴史の中で不明瞭になっていく、さらに言えば、いわば解体していくという。「これほどの一般性に達した以上、動詞の機能は、一般文法の統一の領域が消滅するやいなや、もはや解体する以外にないことがわかるだろう。純然たる文法的なものの次元が解放されるだろうとき、命題はもはや統辞法の単位〔つまり節〕にすぎなくなるだろう。動詞は、(…)〔文法上の〕固有の体系をもちつつ、節の中で他の語に混じって現れることだろう」(MC, p. 111, J, p. 121-122)。文法はもはや、哲学的背景を反映するものではなくなっていく。

「そして他方の極に、言語の顕示力 *pouvoir de manifestation du langage* が、文法より古い自律的問題として再出現するであろう。そして、十九世紀全般を通じて、(…) 言語が問いかけられるのは、言語がもっとも存在に近いところ、言語がもっともたやすく存在を名指したり、存在の基本的意味を(…) きらめかせたり、存在を絶対的に顕示したりできるところにおいてであろう」(MC, p. 111, J, p. 122)。こうした言語と存在との新たな諸関係を認めたのがヘーゲルからマラルメに至る人たちであったとされる。それは端的に存在物の中に位置を占める言語の出現であっただろう。

## (2) 分節化

### 二本の軸に沿った分節化

節の冒頭でフーコーは、古典主義時代において、動詞は「帰属関係の定立 *attribution* と〔帰属関係にあるものの共-実在の〕肯定 *affirmation* との二重の働き」をもっていた (MC, p. 111,

J, p. 122) とこれまでの展開を概括した後、次のように展開する。

「動詞の前後には (…) 言説 (…) の諸部分 [=種々の品詞] がある。それらの領界はまだ確たる性格をもたず、ただ、存在を指示するかすかな *mince* (…) 中心的な形象 [=動詞] によって限定されている」(MC, p. 111, J, p. 122)。「命題のこうした純然たる下図」が「べつべつの文に変わることができ」、言説が「表象のすべての内容を言表できる」ようになるのは、「言説が、表象に与えられるものを部分ごとに〈名指す *nommer*〉語からできているからである」(MC, p. 112, J, p. 122)。「部分ごとに名指す」ことは、部分を抽出し、それを一般化して命名するという手続きになる。フーコーは順に展開する。

「語は指示する。すなわち、その本性において語は名詞である。しかもそれは、まだ (…) ある一つの表象に向けられている以上、固有名詞なのである。(…) だがその場合、それぞれの名詞はそれが指示する表象に完全に密着してしまうから、いかなる帰属関係をも定立することはできず、言語は言語以下のものに下落してしまう。『私たちが実詞として固有名詞しかもたないならば、その数を無限にふやさなければなるまい。それらの無数の語は、記憶力に過重な負担をかけ、私たちの認識の対象にも、したがって私たちの観念にも、いかなる秩序をももたらさず、私たちのすべての言説はひどい混乱におちいるであろう』(原注 G, [II-I] p. 152 [OP1, p. 462a])。名詞が文中で機能をもち、帰属関係の定立がおこなわれるためには、二つの名詞の一方 (…) が、いくつもの表象に共通な何らかの要素を指示しなければならない。名詞が一般性をもつことが言説の諸部分にとっては必要なのだ」(MC, p. 112, J, p. 122-123)。フーコーによって引用されているのは、コンディヤックの『文法』の中の一節——「個別文法」としてフランス語文法を扱う第二部「言説の諸要素」の第一章「実詞 *Des Noms substantifs*」の中の一節——である。

フーコーによれば、名詞のこの一般性は二つの仕方によって得られるが、その一方は「水平方向の分節化」である。この分節化は「互いに何らかの同一性をもつ個体をまとめ、相異なる個体を分離する。この分節化は、しだいに大きくなる（そしてしだいに数を減ずる）群による漸次的な一般化を形成する。この分節化はまた、新たな区分によってそれらの群れをほとんど無限に下位区分することもありえようし、出発点となった固有名詞までさかのぼることもありえよう（原注 G, [II-I] p. 155 [OP1, p. 462b-463a]）」(MC, p. 112, J, p. 123)。ここでフーコーが「水平方向の分節化」と名づけるものに対応する内容を、コンディヤック自身、第二部第一章の、上の引用箇所が続く部分で展開している<sup>(1)</sup>。(なお、フーコーが原注で指示する箇所では、コンディヤックは、群れを無限に下位区分することは無意味であるとしているだけである。)

続けて、フーコーは、この分節化の結果を次のように想定する。「等位関係と従属関係の秩序全体が言語によって覆われることになる。(…) 個体から種へ、次いで種から属や綱へと、言語は、一般性が漸次的に増加する領域 *domaine* に正確に対応して分節される *s'articuler sur*。言語において、この分類上の機能を明らかに示すのは実詞である。つまり、動物、四足獣

quadrupède、犬、バーベット犬 barbet、という具合である (原注 G, [II-1] p. 153 [OP1, p. 462a])」(MC, p. 112, J, p. 123)。この最後の動物の従属関係の例も、コンディヤックからそのまま取られている。

そのままフーコーは、名詞が一般性を得る二つ目の仕方に進む。「2. もう一方〔の仕方〕は、垂直方向の分節化である。(…) この第二の分節化は、それ自体で存立する事物と、独立した状態ではけっして出会うことのない事物——変様 modifications、特質、偶有性、あるいは特徴——とを区別する。つまり、深層に実体があり、表層に性質 qualités があるというわけである。こうした断絶 (… ) は、言説の中では形容詞 adjectif があることで明示されている。形容詞とは、表象の中で、それ自体では存立しえないすべてのものを指示する語なのである」(MC, p. 112-113, J, p. 123)。ここでフーコーが形容詞について語っていることも、コンディヤック自身の記述の中に見いだすことができる。実際、コンディヤックによれば、「形容詞 adjectif はただ何かしらの性質だけを表す。私たちはそれらの性質を実詞に結びつけて、支え soutien を見つけなければならず、それらの性質はその支えに変化をつける modifier のである」(G, II-II p. 157-158 [OP1, p. 463a])<sup>(2)</sup>。

こうして、名詞あるいは分節化を論じるに際して、フーコーがコンディヤックの考え方に基礎を置いていることが確認できる。ただし、水平方向あるいは垂直方向の分節化という考え方はあくまでもフーコー独自のものである。彼はここでの議論を次のようにまとめている。

「このように、言語の本源的な分節化は、(言説の部分であると同時にその条件である〈ある〉という動詞を別にすれば)、直交する二本の軸、すなわち、個体から一般へと向かう軸と実体から品質へと向かう軸、に沿っておこなわれる。この両者の交点に普通名詞が、一方の軸の先端に固有名詞が、他方の軸の先端に形容詞が位置するのである」(MC, p. 113, J, p. 123-124)。

### 表象と言語

さて、名詞と形容詞が区別されたのは、表象がそれ自体で存立するものとそうでないものとに分析されたことにもとづいている (Cf. MC, p. 113, J, p. 124)。とはいえ、フーコーによれば、「言語の分節化と表象の分節化とのあいだには遊び jeu がある。『白さ』という場合、指示されているのはまさに性質だが、それは〔形容詞ではなく〕実詞によって指示されている。(…) こうしたずれ décalage は、むしろ、言語が自らに対して、そしてその固有の厚みの中に、表象のそなえる諸関係と同一の諸関係をそなえていることを示す。実際、言語〔=記号〕は二重化された表象<sup>(3)</sup>ではないのか？ 言語は、表象の諸要素に、当初の表象とは区別される一つの表象〔=記号さらには命題〕を組み合わせる力をもつのではないのか？」(ibid.)。「〔帰属関係の定立を含む〕命題はそれ自体一つの表象であって、その表象がもう一つの表象を分節する。その際ある種のずれの生ずる可能性があり、それが言説に自由を与えるとともに、諸言語のあいだの相違をもたらすのである」(MC, p. 114, J, p. 124-125)。

フーコーは、古典主義時代の論者がこの表象と言語のずれを自覚していたことの例証として『ポール・ロワイヤル論理学』中の記述を引いている (Cf. MC, p. 113-114, J, p. 124)。フーコーはここでの議論にコンディヤックをかかわらせてはいない。しかし、やがてコンディヤックについても、表象に対する言語の「すべり glissement」という、同じように表象と言語の関係の遊びにかかわる概念が問題にされることになる。

### 微細語の機能

ここまで語としては動詞、とりわけ〈ある〉という動詞と名詞とを見たことになる。しかし、フーコーによれば、「表象の諸要素は複雑な諸関係（継起、従属、結果）の網目全体にしたがって分節されているので、言語が真に表象的なものとなるには、それら諸関係を言語の中にもち込まなければならない」(MC, p. 114, J, p. 125)。そこから生まれてくるのが、「名詞と動詞のあいだを循環して〔付属的諸観念を〕指示する」「多くの微細な語 *poussière de mots*」なのである (ibid.)。フーコーは語っている。

このような多くの微細な語が「何らかの観念に対応するのは、ひとたび他の語と結合された場合にすぎない。(…) それらの語は、言語の中で、表象的であると同時に文法的でもある複合的性格をもつ新たな分節化をおこなう。だが、この二つの次元は正確に重なりあうわけではない。／(…) この新たな裁断によって、一般文法は一つの選択の必要に直面する。つまり、<1> 名詞単位以下のところへ分析を推し進め、意味に先だつものとして、意味を組み立てる無意味な要素をあきらかにするか、それとも、(…) <2> 名詞単位の表象力 *efficacité représentative* を実語 *mots pleins* より下に、すなわち小辞、音節の内に、さらには文字そのものの内にまで見いだすか、である。(…) この二つの可能性こそ、十八世紀の文法を分かち分岐点となる」(<1>, <2> の番号は便宜的に筆者が加えた) (MC, p. 114-115, J, p. 125-126)。

以下、フーコーの言う二つの流れを概観しておこう。

<1> 第一の流れにおける名詞単位以下の要素とは、「一致、被制辞、屈折、音節、音」といったものだが、これらの要素の「i. メカニズムはいかなる ii. 表象的価値からも説明がつかない」(MC, p. 115, J, p. 126)。これらの要素は「i. 文法的装置」なのである。「言語は、完成されていくにしたがって、ある命題の意味を、i. 文法的装置を通して表現する。文法的装置はそれ自身 ii. 表象的価値をもたない」<sup>(4)</sup> (MC, p. 116, J, p. 126)。ただし、この<1>の流れは、現実には十八世紀の末葉に至るまで、具体的な学問上の成果をさほど生まなかったようである。実際、「表象的価値が消散してしまう分節化の層に達するや、人々は文法の向う側、もはや文法には捕捉しえぬところ、慣習と歴史の領域に移行してしまった。(…) 十八世紀において、この種の〔文法的〕分析は抽象的な可能性以上のものではありえなかった」(MC, p. 116, J, p. 127)。この<1>の流れは、世紀中葉にボーゼという先駆者をもちながらも、世紀末にシカール、ドゥ・サシらが文法を自立させるまで明確な形はとりえなかった、とされる。

<2> さて、もう一つの流れは、「当時あって言語記号の分析全体を言説の内部に収めるこ

とを可能にした」。この考え方によれば、「連結のためのあらゆる小辞は、結局のところある種の内容をもつという。なぜなら、それらは諸対象が結合する（…）あり方を表象しているのだから。それらが他のすべて〔の語〕と同様、かつて名詞だったとは考えられないだろうか？ただ、それらは、対象の代わりとなるのではなく、人間が対象や、対象相互の結合関係、継起関係を模したりする際の、その身振りを表したのだ<sup>(5)</sup>。これらの語は、しだいにその本来の意味（…）を失ったり、あるいは他の諸語に合体して（…）、それら諸語に変様の一体系を提供したりした<sup>(6)</sup>。そうしたわけで、あらゆる語は（…）眠っている名詞である」（MC, p. 116–117, J, p. 127–128）。

フーコーが続いて掲げる事例から一つを引いておこう。ル・ベルは「あらゆる語を、忘れられた古い名詞（…）がついにふたたびそこに姿を現す音節要素に還元した。たとえば、古代ローマの伝説的建設者〈ロムルス〉（Romulus）の名は、〈ローマ〉（Roma）と〈建てる〉（moliri）からくるし、その〈Roma〉は、力（Robur）を指示した〈Ro〉と、偉大さ（magnus）を指した〈Ma〉とからくる<sup>(7)</sup>」（MC, p. 117, J, p. 128）。フーコーはまた、子音や母音のそれぞれが、その音の性質に関連した意味を本来帯びていた、とするクール・ドゥ・ジェブラン Court de Gébelin（1725–1784）の主張を引いている。

さらに、フーコーはこの流れの延長上に次のように言う。「おそらく私たちの歴史のもっとも古い深みにおいては、（…）歌うような母音群は情念を、堅い子音群は〔身体的〕欲求を語ったのである（原注 Rousseau, *Essai sur l'origine des langues* (Œuvres, éd. 1826, t. XIII, [ルソー『言語起源論』（『全集』、1826年版、第13巻） p. 144–151 et 188–192]）」（MC, p. 118, J, p. 128–129）。原注でルソーの『言語起源論』が指示されるが<sup>(8)</sup>、ルソーはこの著作で直接的に〈母音が情念、子音が身体的欲求を表現する〉と言っているわけではない。実際には、主に「南方の諸言語」は、情念を声（これはほぼ母音と同義で使われる）で表すために発達し、それに対して「北方の諸言語」は身体的欲求を表現するために発達し、分節そして子音が多い、などと展開される。一方、コンディヤックは、『人間知識起源論』（1746）第二篇第一部や『文法』（1775）第一部において、太古に行動言語 *langage d'action*<sup>(9)</sup>から音声言語が生成したとし、その音声言語の発展の過程は、声（母音）の抑揚などを織り込みつつ跡づける。また、『文法』においては、具体例は挙げないものの、聴覚と他の感覚との類比から「個々の感覚的性質を表す音」が決まり、それが要素となって新語が作られるとしている（本論文 p. 21, p. 24 および p. 24 の注 6 を参照のこと）。結局、コンディヤックも今問題の流れの影響を受けていると言えるかもしれない。ただし、フーコーはこうしたコンディヤックの主張には言及していない。

さて、フーコーはこの〈2〉の流れを次のようにまとめている。「言語は、その分節化一つ一つの中で、太古この方つねに〈名指し〉てきた。言語はそれ自体において、（…）もっとも複雑な表象の分析や合成までも可能にするため互いに支えあっている無数の名称 *dénominations* の巨大なざわめきにほかならない<sup>(10)</sup>」（MC, p. 118–119, J, p. 129–130）。

### (3) 指示

フーコーによる一般文法の検討を追って、本節ではまず、言説の単位としての命題の中心をなす(1)動詞とそれによる判断を見た。次いで、「表象に与えられたものを部分ごとに〈名指す〉語」、すなわち名詞を見たが、この場合、表象の一部分を抽出し、それを一般化して命名する普通名詞に焦点が当てられていた。さまざまな普通名詞と、その一種としての形容詞によって(2)分節化がおこなわれるのであった。フーコーは次いで、表象に対する名指し(命名)の原初の形である(3)指示へと向かい、次のように展開する。

「(3)原初の命名 *nomination* (…) の原理は、(1)判断の形式上の優越性と均衡を保っている。あらゆる(2)分節化において展開された言語の両側に、(1)〈帰属関係定立という動詞的役割における存在〉と、(3)〈原初における指示という役割における起源〉とがあるかのようである。後者は(3)〈指されたものに記号をおきかえる〉ことを可能にし、前者は(1)〈ある内容を他の内容に結合する〉ことを可能にする。(1)〈結合〉と(3)〈置換〉の二つの機能 *fonctions* が、(2)表象を分析する能力 *pouvoir* とともに記号一般に与えられたのである」((1)~(3)の番号は理解の便を図って筆者が補った)(MC, p. 119-120, J, p. 130)。

フーコーは、指示作用の探求が二つの説明を要請すると考える。「言語が純然たる(3)指示であった原初の瞬間を再発見することを通して、i. 言語の恣意性(指示するものは(…)それが示すものと異なりうる)と、ii. 言語とそれが名指しているものとの深い関係(ある事物を指示するために特定の音節なり語なりがつねに選ばれる)とが同時に説明されなければならない。i. 最初の要語にこたえるのが行動言語の分析であり、ii. 第二の要語にこたえるのが語根 *racines* の研究である。(…) i. 前者は指示されたものの記号による〈置換〉を説明し、ii. 後者はその記号がもつ指示の永続的能力を正当化する」(i., ii. の記号は筆者が補った)(MC, p. 120, J, p. 130)。

#### 行動言語——言語の恣意性・人為性

さて、コンディヤックは、人間の言語の原型が i. 行動言語にあると初めて主張し、その成立の事情について、『人間知識起源論』第二篇第一部、『文法』第一部、あるいは『論理学』といった著作で考察している。ごく図式的に言うと、複数の人間が交わる生活圏で、一人の人間は「欲求」を満たそうと「情念の叫び声」を上げ、「行動」するが、そこに居合わせた別の人間は「本能」に基づいてそれに対応することで、相互の交流が成立するようになる、とされる<sup>(1)</sup>。こうした議論の基本線はコンディヤックの各著作で一貫している。フーコーは、こうしたコンディヤックの議論を念頭に、行動言語を論じることになる。フーコーは言う。

「行動言語(…)ははじめから与えられているわけではない。(…)顔面をしきりと動かし、人は分節化されていない——すなわち『舌や唇によって刻印されていない』(原注 G, [I-I] p. 8 [OP1, p. 428b])——叫びを発する。」(MC, p. 120, J, p. 131)。フーコーが短く引用するのは、原注にあるとおり、コンディヤック『文法』第一部第一章「行動言語」の一部である。フー

コーはさっそく独自の考察を付け加える。

「これらすべて〔の行動〕はまだ（…）記号でさえもなく、われわれの動物性の結果と延長にすぎぬ。しかしながら、このような明白な動きは、われわれの諸器官の構造だけに左右されるため、普遍的であるという利点をもっている。そこから、人 l'homme が、自身や仲間において、人の同一性を認めるという可能性が生じるのだ。したがって人は、他人が発するのを聞く叫びやその顔に知覚される歪みに、それまで何度か彼自身の叫びや動作 *mouvements* にともなった *doubler* ことのある同一の表象を結びつけることができるだろう。彼はそうしたしぐさ *mimique* を、他人の思考の標識および代替物として、つまり記号として受けとることができる。理解はここから始まる」(ibid.)。『言葉と物』に3年先行して刊行された『臨床医学の誕生』(1963)の第六章「記号と症例 *des signes et des cas*」で、フーコーは、コンディヤックが『人間知識起源論』で推定した行動言語の成立の事情をすでに一度考察し、その際は「本能」をそのまま説明原理としていた<sup>(2)</sup>。一方、今見た引用箇所では、フーコーはより踏み込んだ考察をしていることになる。

次いでフーコーは、「記号の意図的用法」というべきものを指摘する。「反対に、彼〔人〕は、記号となったこのしぐさを用いて、（…）観念や、（…）感覚、欲求、苦痛を、相手の内に生じさせることもできるだろう。つまり他人の前で、ある対象に向かって、故意に叫びが発せられるのであり、それは純然たる感投詞なのである（原注）。記号のこうした意図的用法 *usage concerté*（…）とともに、言語のような何ものかが生れかけるのだ」(MC, p. 120, J, p. 131)。この部分の原注で、フーコーはデステュットによる行動言語の分析を参照するよう指示しているが、この記号の意図的用法というべきものは、コンディヤックの展開においても認めることができる。たとえば『人間知識起源論』では次のように語られる。「次に二人は、自分たちがかつて感じた感情を互いに伝えるためにその記号〔叫びや行動〕を使うようになる」(EOC, II-I-3)。

こうしてフーコーによれば、「行動が言語となるには、一定の複雑な操作を経なければならない」(MC, p. 121, J, p. 131)。すなわち、他人と自分との「類比に留意すること」がまず必要であった。「他人の叫びとその人が感じているもの——これが未知数である——との関係は、わたしの叫びとわたしの食欲あるいは恐怖との関係に等しい」(ibid.)。次いで、人は「時間を逆転して、記号をそれが指示する表象より以前に故意に用いること」(ibid.)ができる。これによって、人は「他人の内にそれらの叫びや身振り *geste* に照応する表象を生じさせようと意図すること」(MC, p. 121, J, p. 132)ができる。この際、フーコーは、次のような興味深い指摘をしている。「ただし特徴的なのは、叫びをあげることによってわたしが〔他人の内に〕生じさせようとするのは、飢えの感覚ではなく、この記号とわたし自身の食べたいという欲望との関係の表象だということだ」(ibid.)。ただし、フーコーは、こうした主張をした論者がいたかどうかを含めて、これ以上の説明はしていない。

さて、フーコーによれば、「行動言語は生成 *genèse* を通じて言語と自然をつなぎあわせている」(MC, p. 120, J, p. 131) が、それはむしろ「言語を自然から切り離すためであり、言語と〔単なる〕叫びとの消しがたい相違を指摘し、言語の人為性を基礎づけるため」(MC, p. 120-121, J, p. 131) なのである。フーコーは言う。「言語は、理解や表現の自然な運動にではなく、〈記号と表象との可逆性がある分析可能な諸関係〉にもとづいている。言語は、(…)〈表象が意図的に自己からある記号を分離し、その記号によって自己を表象させる〉とき生れるのである。(…)〈表象が自己に記号を与える〉からこそ語が生れ、(…)言語全体が生れるのだ。『行動言語』は、その名にもかかわらず、言語を行動からへだてる記号の還元不能の網目を出現させるのだ」(MC, p. 121, J, p. 132)。

こうして言語は発展の道を歩み始める。「この行動言語を構成する諸要素(音、身振り、顔の歪み)は自然によってつぎつぎと提供されるが、それらの大部分は、その指示するものと(…) 同時もしくは継起の関係をもつにすぎない。叫びは恐怖に似ていないし、差しのべた手は飢えの感覚に似ていない。こうした記号は、自然によって決定的なかたちで指定されている以上、意図的 *concerté* なものになっても『思いつきや気まぐれを容れない』ままであろう(原注 G, [I-I] p. 10 [OP1, p. 429a])。だがそれらは、その指示するものの本性を表現しはしない。両者のあいだに類似はないからである。そして、このことから出発して *à partir de là*、人々は約束による言語 *langage conventionnel* を確立することができるであろう。彼らはいまや事物の標識となる記号をじゅうぶんにもっているから、それらの記号を分析し組みあわせる新たな諸記号を定めることができるのだ」(ibid.)。

さて、フーコーは原注で、『思いつきや気まぐれを容れない *sans fantaisie et sans caprice*』という表現をコンディヤック『文法』第一部第一章 p. 10から引いたとしているが、当該箇所はこの表現は認められない。ただし、類似の表現は認められるため、フーコーの写し間違いであろう。当該箇所は、フーコーの展開にも対応していて興味深いので引いておこう。

「自然こそが私たちにそれら〔=行動言語の最初の諸記号〕を与えたのである。しかし、私たちにそれらを与えながら、自然は私たちが自分で記号を案出するよう道筋をつけてくれたのである。したがって、私たちは私たちのあらゆる想念を身振りで表現できるだろう(…)。この〔行動〕言語は自然的記号と人為的記号から形成されることだろう。／(…)恣意的記号とは何だろう。理由なしに気まぐれによって *sans raison et par caprice* 選ばれた記号である。よって、それらは理解されない。反対に、人為的記号は納得して選ばれた記号である。それらは、既知の諸記号によって理解が準備されるよう巧みに案出されなければならないのだ」(G, I-I, p. 10-11 [OP1, p. 429a])<sup>(3)</sup>。

フーコーは、新たな諸記号の形成について次のように語る。「人は記号をつくるためのものを自然から受けとるが、それらの〔自然を起源とする〕記号は、まず、人が他の人々と同意して、残されるべき記号、それらに認めるべき価値、それらの用い方の規則を選びとるのに役立つ

つ。ついで、最初の諸記号をモデルにして新たな諸記号を形成するのに役だつ」（MC, p. 122, J, p. 132-133）。より具体的には、人々は「音声記号（遠くからでも認知しやすく、夜間にも使用できる）を選びとり」、「まだ標識をもっていない表象を指示するために、隣接した表象を示す音に近い音を合成する」。「このようにして、狭義の言語が、行動言語の、あるいは少なくともその音声的部分の、側面的延長をなす一連の類比 analogies によって構成されていく」（MC, p. 122, J, p. 133）。

ここでフーコーは、今し方紹介したコンディヤックの論述の少し先を引用する。「狭義の言語は行動言語に類似しており、『まさにこの〔行動言語との〕類似 ressemblance がその〔狭義の言語の〕理解を容易にする。この類似は類比と呼ばれる。われわれの掟となるこの類比が、記号を行きあたりばつりに恣意的に選ぶことを私たちに許さないことはおわかりだろう』（原注 G, [I-I] p. 11-12 [OP1, p. 429b]）」<sup>(4)</sup>（MC, p. 122, J, p. 133）。こうして私たちは、行動言語にかかわるフーコーの論述が、コンディヤックの議論を参照しつつ、その含意を最大限深化させたものであると考えることができるのである。

### 語根

フーコーは次いで、語根の理論の考察に移る。「ii. 語根の理論は行動言語の分析（…）の内部に正確に位置を占める。語根とは、多数の——おそらくはすべての——言語の中に見いだされる同一の基本語である。それらは意志の介入する余地のない叫びとして自然から強制され、行動言語によって自然発生的に利用されたのだ。（…）もしすべての国民が、あらゆる風土において、行動言語の提供する材料の中からこれらの〔語根となる〕基本的音声を選び出したとすれば、それは、彼らがそれらの音声の内に、指示する対象との類似、あるいは類比的対象への適用可能性を、二次的かつ反省的な仕方で見出したからにちがいない」（MC, p. 122-123, J, p. 133-134）。

すでに見たようにコンディヤックこそ行動言語の理論的枠組みを最初に提起したのであった。語根の理論は、その行動言語を基礎において成立するとされる。ところで、音声と指示対象との類似は、上で見たように一般論としては否定されていた（本論文 p. 20 参照）。今新たに問題となる類似は、あくまでも「二次的かつ反省的な仕方で見出されるのだ。すなわち、対象の音に似た音（擬音）、対象から得られる視覚などの感覚と強弱などの様態が似た音、対象の運動と似た発声器官の運動によって発せられる音、などが対象と類似性をもつことから語根となるとされる。その際、フーコーはドゥ・ブロス De Brosses、コピノー師 abbé Copineau といった論者を引いている（MC, p. 123, J, p. 134）。コンディヤックの名は引かれませんが、コンディヤック自身も、たとえば『文法』第一部第二章で、簡単ではあるがこの問題にふれ、聴覚と他の感覚との「類比 analogie」を基礎に、さまざまな音が実際の各種の感覚の記号として選ばれるとしている（G, I-II, p. 23 [OP1, p. 432a]）。

結局、「語根とそれが名指しているものとの類似は、人間たちを結びつけ行動言語を言語へ

と整えた約束ごとによって、はじめて言語記号としての価値をもつ。このようにして、表象の内部において de l'intérieur de la représentation、記号がその指示するもの ce qu'ils désignent の本性自体に通じ rejoindre、すべての言語が原初の諸語という宝を一様に受け入れることになるのだ」(MC, p. 123, J, p. 134)。

続いてフーコーは、当時の関係諸著作において語根について語られていたことを、おおよそ次のようにまとめている。語根はほとんど一音節からなる。その数は一節にはヘブライ語で二百という。語根が大部分の言語に共通であることを考えれば、この一揃いはさらに限られたものとなるだろう。しかし、これら共通の少数の語根から出発して、それぞれの言語が特殊性を帯びて形成されるのである。こうして、言語は今やその系図〔系譜学〕 *généalogie* の中で展開することができるようになる<sup>(5)</sup>。フーコーは続ける。「このような語根の探究は、古典主義時代が一時放置しているかにみえた、歴史と母なる言語の理論への回帰と見えるかもしれない。実際には、(…) それはむしろ、歴史というものを、表象と語との同時的裁断を次々と〔経時的に〕たどることに還元してしまう。古典主義時代において、言語は、(…)〔第一に〕分析のための空間であった」(MC, p. 124, J, p. 135)。

ここから次のようなことが帰結する。「〔十八世紀における語源研究 *étymologies* において〕導きの糸となっていたのは、語の外形上の変化の研究ではなく、〔語の空間における〕意味の恒常性であった」(MC, p. 125, J, p. 135)。語源学においては、「組みあわせや屈折のすべての痕跡を語から取り去り、一音節の要素に到達すること」が求められた (MC, p. 125, J, p. 136)。そして、「問題の一音節語が変化することは認めなければならない」(ibid.)。「語根の連続性をその歴史の全般にわたって保証する、消えることのない唯一の恒常的要素は、意味の同一性(…)にほかならない。(…) 語の意味こそ『人が語ることのできるもっとも確実な光』〔テュルゴ〕なのだ」(ibid.)。

変化の中で意味の同一性が保たれるとされる。この点についてはさらに次節で論じられることになるだろう。

#### (4) 【意味の】派生 *dérivation*

フーコーはこれまでの問題を次のようにまとめ、また、新たな問題を提起する。「いろいろな語は根源的本質において名詞かつ指示であり、またそれらの語は表象そのものが分析されるのと同じ状態で分節されているが<sup>(1)</sup>、なぜこうした語は(…) 起源における意味から遠ざかり、隣接した意味、より広いか、より狭い意味を獲得するのか。(…) なぜ、語は新たな音ばかりでなく新たな内容を獲得し、その結果、おそらく同一であった一揃い *équipement* の語根から、さまざまな言語が、異なる音や、さらには互いに意味が対応しない語を形成することになったのだろうか」(MC, p. 125-126, J, p. 136)。先の引用でも、この引用でも、語は音など「外形上の変化」を被るとされた。一方、先の引用で、語の意味の同一性が保たれるとされた

のに対して、ここでは〈一つの語の意味の変様〉という問題が提起される<sup>(2)</sup>。

フーコーは続ける。「語形の変様には規則がない。(…)その原因はすべて外部にある。つまり、発音の容易さ、流行、習慣、風土——寒さは「唇で吹く普」を、暑さは「喉の気音」を助長する——といったものだ。これに対して意味の変化は、(…)語源学を可能にする程度には制限されたものである以上、(…)いくつかの原理にもとづいている」(MC, p. 126, J, p. 136)。結局、前節末尾で語られた意味の恒常性や同一性も、ここで語られる「いくつかの原理にもとづいた」「制限された」「意味の変化」の中に見いだされるゆるやかな恒常性、同一性なのではあるまいか。フーコーは次いで意味の変化の原理の検討へと進む。

「これらの〔意味の変化の〕原理はいずれも空間的なものである。ある原理は1. 事物間の目に見える類似や隣接関係にかかわり、他の原理は2. 言語が蓄積される場所とそれが保存される形態にかかわる。つまり、比喩形象 figures と文字表記 écriture である」(ibid.)。

### 文字表記と思考の進歩

フーコーは後者、文字表記から論じる。フーコーによれば、  
「2. 文字表記には、a. 語の意味を表すもの〔表意文字〕と、b. 音を分析して復元するもの〔表音文字〕との、二つのタイプが知られている。(…) a. [語の指示する事物を正確に描くことが文字表記の起源であったとしても] 真の文字表記が始まるのは、人々が、事物それ自体ではなく、その事物を構成する要素 éléments の一つ、事物を示す通常の状況 circonstances の一つ、あるいはまたその事物が似ている何かべつの事物 autre chose、を表象し始めるときにほかならない」(MC, p. 126, J, p. 137)。

ここで「真の文字表記が始まるのは」に続く内容は、ウォーバートン『エジプト象形文字論』Warburton, *Essai sur les hiéroglyphes des Égyptiens* (仏訳、1744) 第一部第三節に対応している<sup>(3)</sup>。そして、この著作の当該箇所は、コンディヤック『人間知識起源論』第二篇第二部第十三章「文字表記について」にそのまま取り入れられてもいるのである。ともあれ、フーコーはウォーバートンにならって、人が事物の要素、状況、類似物の表象を用いて比喩的に事物を指示したことから、「象徴文字 écriture symbolique」(象形文字)が発展したとする<sup>(4)</sup>。

しかし、フーコーによれば、こうした「比喩的文字 écriture figurée」にはほとんど進歩の余地がない。「記号が数を増すきっかけとなるのが、表象の細心な分析ではなくきわめてかすかな類比関係 analogies [=比喩的關係] であるから、助長されるのは民族の反省というより想像力である。(…) [また、何らかの発見をしたとしても、] それを伝達するための [新しい] 記号がない。逆にまた、昔から伝えられてきた記号は、それが形象化している figurer 語 [=音] と内在的な関係をもたぬため、つねに信頼のおけぬものでしかない。時代から時代へと、〈同じ音が同じ [文字という] 形象 figure に宿っている〉という確信はけっしてもちえないのだ」(MC, p. 127, J, p. 138)。最後の部分でフーコーは、「同じ音」が意味の連続性や伝達を保証するとしているが、実際、続けてデステュットやヴォルネを引いて、「音声中心主義」が存在し

たことを認定しているように思われる<sup>(5)</sup>。

さて、フーコーはアルファベット文字へと議論を進める。「b. アルファベット文字 *écriture alphabétique* をもつ場合、(…) 人々は観念ではなく音を空間に書きうつすのであって、種々の音から共通の要素を抽出し、少数のきまった記号をつくりだす。これらの記号を組み合わせれば、可能な限りのすべての音節と語が形成されることだろう。象徴文字が、(…) 相似関係の曖昧な法則にしたがい、言語を (…) 反省的思考の諸形式から逸脱させて *faire glisser* しまうのに対して、アルファベット文字は、表象の図示を断念し、音の分析に、理性そのものにとっても有効な規則を移入する。その結果、個々の文字は観念を表象しないとはいえ、それら文字は観念と同じように組みあわせられ、諸観念はアルファベット文字と同じように結合され分離される (原注 G, I-II [= p. 21-38] [OP1, p. 431b-435b])」(MC, p. 128, J, p. 138-139)。

フーコーは原注で、コンディヤックの『文法』第一部第二章<sup>(6)</sup>を参照するよう指示している。この章におけるコンディヤックによれば、人は、個々の感覚的性質を表す音を要素として組み合わせて新語を作り、複数の感覚的性質を帯びた現実の事物を示すことができるという (G, I-II, p. 23-24 [OP1, p. 432a])。コンディヤックはここで音声言語について語っており、アルファベットについて語っているわけではない。しかし、フーコーはここから、音声に対応するアルファベットが「分析」の有効な手段となったこと、さらには、コンディヤックら当時の思想家もそのように自覚していたことまで読み取るのである。

フーコーはアルファベットについて続ける。「表象と書記記号 *graphisme* との正確な平行関係を破ることで、書かれたものを含む言語全体を分析の一般的領域に宿らせることが可能になり、また、文字表記の進歩と思考の進歩が互いを支えあうことが可能になる」(MC, p. 128, J, p. 139)。アルファベット表記は、外見的な表象に張り付いた状態から身を離し、自由な分析の手段となることができるであろう。新たな概念、新たな語を容易に表示することができよう。「いくつかのきまった書記記号 *signes graphiques* が新たな語すべてを分解できるし、発見がおこなわれるたびにすぐ (…) それを伝達できることとなろう。(…) このようにして、言語の内部に、分析と空間が出会う語のあの折り目自体の中に、進歩の (…) 可能性が生じる。(…) 言語は、時間のたえざる断絶に空間の連続性を与える。そして、言語が表象を〔空間的に〕分析し、分節し、裁断する限りにおいて、言語は時間をとおして諸事物の認識を連続させる力をもつのである。言語とともに、空間の雑然とした単調さが区分され、他方、継起の〔時間上の〕多様性が〔空間の連続性を与えられて〕統一されるのだ」(MC, p. 128-129, J, p. 139)。

### 分析の原理

とはいえ、フーコーによると、「文字表記は確かに (…) 分析を支えるが、それは分析の原理ではなく、またその最初の動きでもない」(MC, p. 129, J, p. 139-140)。フーコーはここで 2. 文字表記を離れ、意味の変化の第一の原理である 1. 比喩形象へと話を進める。

フーコーはすぐに続ける。「分析の最初の動きは、注意、記号 *signes*、そして語 *mots* に共通

するある種のすべり *glissement* である<sup>(7)</sup>。精神は、ある表象の中で、その表象の部分をなす要素、その表象に付随する状況、その表象が思い出させる他の類似した——ただしそこにはない——事物、そうしたものに着目 *s'attacher à* して、それらに言語記号 *signe verbal* を付与することができる（原注 EOC, [I-II-IV] *Oeuvres*, t.1, p. 75-87）。このようにして、言語は発達し、最初の指示 *désignations* を出発点として少しずつ漂流 *dérive*<sup>(8)</sup> を続けてきたのである」（MC, p. 129, J, p. 140）。

先の引用（本論文 p. 23）では、ウォーバートンにならって、人は、事物それ自体ではなく、事物の要素、状況、類似物の表象を記号（象形文字）として用いて元の事物を指示した、と語られた。今引用した箇所では、人（精神）は、事物（の表象）の要素、状況、類似物に注目して、それらに言語記号（おそらくは音声、次いでその文字化であるアルファベット）を付与し、それによって言語は形を変えてきた、と語られた。主張の力点は、象形文字についてはその新たな生成、音声言語についてはその発展に置かれているとも取れるが、どちらの場合も記号の生成・発展の経緯を類似的にとらえていると言えよう。

さて、フーコーは原注でコンディヤック『人間知識起源論』第一篇第二部第四章の全体を指示している。だが、フーコーがコンディヤックを引いている点には疑問があり、実際、当該の章でフーコーの展開に関係が深いと思われるのは次の表現にとどまる。「記憶は（…）観念の記号や、その観念に伴った状況と呼び起こす力の中にこそ存する」（EOC, I-II-IV-39）。ここで記号とは、音声記号を指していよう。コンディヤックにおいては、記憶は、知覚そのものを呼び起こす想像とは異なって、経験したことのある知覚（観念）の名前（記号）、その知覚とともにあった状況、さらにはその知覚の抽象観念を呼び起こす機能であるとされる（もともと、本質的には想像と記憶は同じものである。記号、状況、抽象観念もそれ自体は知覚だからである）（EOC, I-II-II-18）<sup>(9)</sup>。いずれにせよ、ここでコンディヤックは、ある知覚表象それ自体よりも、関連する記号や状況が呼び起こされる可能性があることを示唆している。フーコーもここに、ある表象が記号によって代理されることや、表象間に連関があることを読み取っているのではないか。その先に、フーコーは、ある記号による「最初の指示」が「すべり」を起こして、その記号が「漂流」したと想定しているように思われる。

フーコーはさらに具体的に展開する。「起源にあつては、すべてが名——固有の、あるいは単独の名 *nom propre ou singulier* ——をもっていた」が、「次いでこの名が、その事物の含む一要素だけの名となり、さらに、この要素をひとしく含んでいる他のすべての個体にも適用された」。たとえば「木」という名が一般化（普通名詞化）した。「最初の名は、また、事物にもなう顕著な状況の名となった」。こうして、たとえば「夜」という名も一般化した。こうしたフーコーの展開は、当時の何らかの著作を念頭に置いているように感じられるが、筆者には特定できなかった。フーコーは続ける。「最後に、もとの名は似たものの名ともなった」。こうして、「薄く滑らかなもの」は「葉」と呼ばれるようになった（MC, p. 129, J, p. 140）。この最

後の例は、フーコーの原注によって指示されるとおり、デュマルセの『比喩論』(1730)に認めることができる<sup>(10)</sup>。

こうして、先にウォーバートンについて言及された要素、状況、類似物といった概念が、コンディヤックやデュマルセにおいても認められることになる。象形文字、音声記号、アルファベットと記号の種類は異なるろうとも、要素、状況、類似物といったものを手がかりに記号は成立するであろうし、また比喩的に変様、拡張されていくであろう——フーコーはこのように示唆していると思われる。

フーコーは続ける。「[共通要素に着目して]いくつかの事物にただ一つの名を与える *donner un seul nom* ことを可能にする漸次的分析と、言語のより進んだ分節化とは、修辞学でよく知られる基本的な比喩形象 *figure* にもとづいておこなわれた。(…)これらの比喩形象は、文体上の凝った技巧の結果なのではなく、自然発生的なあらゆる言語に固有な可動性 *mobilité* を表すものなのだ」(MC, p. 129-130, J, p. 140)。先には、事物の要素、状況、類似物の表象を用いて比喩的に事物を指示したことから象形文字が発展した、とされた(本論文 p. 23)。それに続き、音声記号についても、比喩的な指示によって記号体系が発展するとされた(p. 25)。さらにここでは、そうした指示を可能にする記号の可動性が想定されている。

フーコーは続ける。「この可動性は、起源において、今日におけるよりはるかに強かったと考えられる。今日では、分析が精緻をきわめ、基盤目が緻密であり、等位と従属の関係がはっきりと確立されているので、語が所定の場所から移動する *bouger* 機会はほとんどない。けれども、語の数が少なく、表象がまだぼんやりしてよく分析されておらず、情念が表象を変様させたり基礎づけたりしていた人類の黎明期には、語は大きな移動能力 *pouvoir de déplacement* をもっていた。語は本来の意味をもつまえに比喩的な意味をもったとさえ言えるだろう。つまり語は、単独の名としてのあり方を獲得するとほとんど同時に、自然発生的な修辞の力によって、早くも種々の表象の上に拡張された *se répandre sur* ののである」(MC, p. 130, J, p. 140)<sup>(11)</sup>。

こうした議論は、デリダがそのコンディヤック論『たわいなさの考古学』(1973)の末尾近くで論じた内容を思い起こさせる。デリダはそこで大意次のように語っていた。——対象に対する記号の関係はそもそも中断されやすいものだ。ある記号を「比喩的に」受け取ることを許す意味の拡張の過程があることで、意味の一般化も可能となる。拡張された意味は対象との関係において、つねに浮遊し弛緩している。この意味の拡張によって、記号は観念から乖離してゆくことになる<sup>(12)</sup>。——デリダはこの部分に至る過程で緻密な議論を展開しているが、本論文では立ち入ることはできない。ただ、フーコーとデリダという第二次大戦後のフランス思想を代表した二人が、二人ながら、十八世紀のコンディヤックとその周辺思想家たちの言語をめぐる議論を参照しつつ、言語のあり方に迫ろうとしたこと、あるいは、二人ながら、言語の本源に比喩的な働きを認めていたこと、つまりは同様の言語観に立っていたこと、は大変興味深い。

さて、フーコーは、比喩的な意味の拡張についてさらに展開する。文字にせよ音声にせよ、「記号は、表象の分析にしたがって、内部にある要素、隣接した一点、類比関係にある形象、の上に移行する *venir se poser sur* 自由をもつのである。諸言語は、(…) 人間本性の普遍性ゆえにおそらくは共通だった原初の指示名称から出発して、相異なるかたちに展開し続けた。(…) これは、語が、〈時間〉の中にではなく、それが本来の座を見いだし、移動し *se déplacer*、屈曲し *se retourner sur eux-même*、ゆっくりと一本の曲線をくりひろげることのできる〈空間〉、すなわち〈比喩のはたらく *tropologique*〉空間の中に〈場〉をもつからにはかならない」(MC, p. 130, J, p. 141)。

ここには、ウォーバートンやデュマルセで確認された、事物（の表象）とその要素、隣接点（状況）、類比形象（類似物）との比喩的關係（本論文 p. 23, p. 25-26を参照）がまた顔を出している。そして、ここでは問題は、「分析」、つまりは認識と関連させられている。表象の分析も、比喩空間の中で記号の体系としての形を取るであろう。比喩空間の中で語を生成、変形、更新しながら、表象の分析を進め、分析の結果を言語として再構成することになる。

フーコーは続ける。「言語は表象の同時性を、音声の継起として展開した。(…) 言語がおこなうのは、分散している表象 *dispersions représentées* を線状に配列することにほかならない。命題は、修辞法がまなざしに感じられるように〔空間的に〕した比喩形象を〔継起的なかたちに〕展開し *dérouler*、それを〔知的に〕理解させる。比喩のはたらくこの空間がなければ、帰属関係 *lien d'attribution* 定立を可能にするあらゆる普通名詞から言語が形成されることもあるまい」(MC, p. 130-131, J, p. 141)。「逆に、〔普通名詞などの〕語によるこうした分析がなければ、比喩形象は無言のまま瞬時の存在をもつにすぎまい。(…) / 命題の理論から〔意味の〕派生の理論まで、言語に関する古典主義時代の反省——「一般文法」と呼ばれたもの——のすべては、「言語は分析する」という単純な一句の綿密な注釈にほかならない。それまでつねに〈言語は語る〉ものだと思ってきた西欧の言語経験のすべては、十七世紀になって、まさにこのようなところへと急転回したのである」(MC, p. 131, J, p. 141-142)。

こうしてフーコーは、一般文法を構成する四つの主要理論と彼が見なしたものを検討し終えたことになる。最後に彼はこれらの理論が密接な関係にあることを示そうとする。

#### 4. 言語の四辺形

##### 言語の中心としての名

さて、フーコーによれば、以上見た命題の理論、分節化の理論、指示の理論、派生の理論は「二つずつ対立し、また支え合い」、「四辺形の線分のようなもの」——むしろ方向性のあるベクトルのようなもの<sup>(1)</sup>——「を形成する」(MC, p. 131, J, p. 142)。フーコーの記述から、そうした支え合いと対立の関係を整理してみよう (ibid.)。

1. 命題から分節化への線分。命題の形式は、分節化によって内容を得る。他方、分節化にお

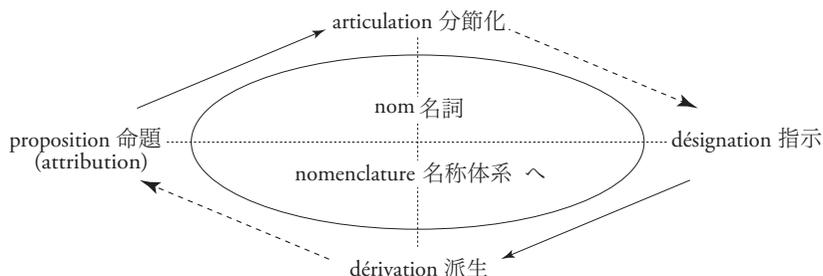
ける「事物同士を区別 *différencier* する命名行為」は、命題における「事物同士を結合 *relier* する帰属関係定立」と対立する。

2. 分節化から指示への線分。「〔分節化の対象である〕すべての名詞形態の〔事物との〕接合点」は、指示によって明らかにされる。指示は、分節化における「一般的なものの裁断」と対立する。

3. 指示から派生への線分。〔指示の〕起源にある語根から発して、派生は実現する。派生をひきおこす「表象の表面でのすべり」は、指示における「語根と表象を結ぶ唯一で安定したきずな」と対立する。

4. 派生から命題への線分。〔意味の〕派生を前提として、〔命題における〕帰属関係を可能にする一般性は獲得される。命題は「継起的順序にしたがって展開される」点で、派生が「空間的な比喩形象にしたがっておこなわれる」のに対立する。

フーコーが『言葉と物』第一部の末尾に付けた、古典主義時代のエピステーメーを示す図を参考に、第四章「語ること」に関連する概念の間関係を図示すると次のようになる。



(注) 名詞の外周の4本の線分の直線と破線の使い分けは、フーコーの図に従っている。これについては、本論文(下)で多少とも言及する予定である。

フーコーによれば、この四辺形の相対する頂点のあいだにも、いわば対角線的な関係がある(MC, p. 131-132, J, p. 142-143)。

(i) 派生と分節化。言語の要素としてのさまざまな語が派生を続け、さまざまな意味の広がりを獲得したことで、さまざまな語が適合しあう分節された言語が成立した。

(ii) 指示と命題。語がつねに事物を表象し名指し代替していることが前提にあって、語は表象作用が存在することそれ自体を語る〔肯定する〕ことができる。

フーコーは大意このように語るが、記述が晦渋である上、言語に四辺形の関係を想定することや、辺(ベクトル)の関係や、相対する頂点間関係を問題にすることの根拠やねらいもわかりにくい。

しかし、フーコーは結局、名詞の重要性を主張することに行き着く。次に引用するが、今見た二つの対角線的な関係に(i)、(ii)の番号をふることにする。「この(i)、(ii)二本の対角線の交

点、四辺形の中央、(ii) 二重化した表象が (i) 分析 *analyse* として現れ、(ii) 代替物 *substitut* [= 語] が (i) 分類する *répartir* 能力をもつところ、それゆえに (ii) 表象の (i) 一般的分類法 *taxinomie* の可能性と原理とが宿るところ、そこに〈名〉〔名詞〕がある。〈名指す〉とは、ある表象の (ii) 言語表象を与えるのとまったく同時に、この〔言語〕表象を (i) 一般的表の中に位置づけることである」(MC, p. 132, J, p. 143)。結局、(ii) 言語を含む表象の世界において、(i) 「分析」、「分類」、「表の中への位置づけ」といった操作がおこなわれることになるのである。

さらにフーコーは続ける。「古典主義時代の言語理論のすべては、この〔名という〕特権的で中心的な存在のまわりに組織される。(ii) 表象が命題の中に表されうるのはまさにこの存在による(…)。したがってまた、(i) 言説が認識と同じ様態で分節される〔本論文 p. 9, 22 参照〕のも、またこの〔名という〕存在によってであるのにはかならない。(…) すべての名が正確であり、(i) 名の基礎となる分析が完全に反省的であり、言語が「よくできた」ものであるならば、(ii) 真である判断 [= 命題] を表明するのに何らの困難もないはずだし、たとえ誤謬が生じたとしても、それは代数計算の場合と同様に明白で発見しやすいものにちがいない」(MC, p. 132, J, p. 143)。

ここで議論は、本論文 II-3 「一般文法の検討」の (1) 「動詞の理論」の「表象の實在的關係の肯定」でも見た、表象の真実性の問題へと再度行き着く。フーコーは言う。「けれども実際には、(i) 分析の不充分さや派生によるすべりの結果、正当でない分析や抽象や組みあわせに名が与えられている。(…)〔しかし、お伽話中の語ではなく、表象の表象としての〕語を思考するときには——たとえどのように抽象的(…)な語であっても——(ii) それ表象しているものの可能性を肯定しないわけにはいかない。だからこそ名は、(…) そこから出発していつさいの言語が、(…) (ii)〔指示対象としての〕真実と関係をもつことができる、そのような点であるとも見えるのだ」(MC, p. 132-133, J, p. 143)。

なお、こうした名をめぐるフーコーの総括的な展開の中に、(i) 派生と分節化、(ii) 指示と命題という、言語の四つの要素すべてが含まれていることを確認しておきたい。結局、「古典主義時代の言語経験のすべては、まさしくそこ〔名〕で結ばれあう」(MC, p. 133, J, p. 143)のだ。フーコーはそうした言語経験を例示している。

1. まず、文法的分析。これは「語〔名〕の研究であると同時に、語〔名〕を (i) 作り上げ *bâtir*、利用し、その (ii) 表象的機能を改良するための規則でもある」(ibid.)。文法的分析は言語の改良の実践的研究なのであり、言語の四要素とそれらの対角線的関係にかかわるであろう。

2. 次いで、「ホップズから〈観念学〉にいたる哲学の基礎をなす (i) 唯名論 *nominalisme*」(MC, p. 133, J, p. 144)。この唯名論は、「言語に対する批判や、(…) コンディヤック〔ら〕(…)に見られる<sup>(2)</sup>一般的で抽象的な語に対する不信と切り離せない」(ibid.)。

さて、唯名論は本来中世哲学、特に「普遍論争」において問題となった概念であり、普遍は

単なる名辞〔記号〕であると考え、普遍的なものが実在するとした実念論 *réalisme* に対立した。ここでフーコーは無造作に語っているが、こうした唯名論の概念は、古典主義時代の後期にあって経験論者でもあったコンディヤックの哲学に安易に適用されるべきではあるまい。また、フーコーはコンディヤックに関して、どの時期、どの著作を問題にしているのかも明確にしていない。ここで立ち入って論じることはできないが、晩年の『論理学』や『計算の言語』より前の時期におけるコンディヤックは、あえて普遍論争の概念を参照するならば、むしろ一種の「概念論 *conceptualisme*」の立場に近かったとも考えられる<sup>(3)</sup>。そして、コンディヤックはこの時期にすでに、「言語に対する批判」を日常的な言語を対象として行っていた（本論文 p. 2, 批判の四形態の1を参照）。一方、晩年の『論理学』や『計算の言語』においては、確かに唯名論の主張としか受け取れない記述が見受けられるが（*La Logique*, II-IV, V; *La Langue des calculs*, I-IV）<sup>(4)</sup>、その場合、理想的な記号体系——「よくできた言語」（注1-6参照）——は代数学であると見なされることになる。よってこの時期には、日常的な言語は「批判」の対象であり続けつつ、加えて「一般的で抽象的な語」も、唯名論の立場からして実在という支えをもたない以上、代数学の記号に比べてつねに不完全なものに見なされ、それゆえ「不信」の対象であったことだろう。

3. 最後に、「(ii) 完全に透明な言語、つまり、事物それ自体が混濁なしに名指されるであろう言語、を得ようとするユートピア思想」（MC, p. 133, J, p. 144）。2.における「一般的で抽象的な語に対する不信」と隣り合わせて、「(ii) 事物それ自体が混濁なしに名指されるであろう言語」への憧憬があったであろう。コンディヤックの場合は、「恣意的だが正確に反省された体系（人工言語）」が目指された（*ibid.*）。他方で、「まったく自然的で、顔が情念を表現するように思考を翻訳するであろう」、「直接的記号でできた」言語が、ルソーによって、『対話 *Dialogues*』（1782）の「第一対話」で夢見られたとされている（*ibid.*）<sup>(5)</sup>。

結局、フーコーは名の重要性について、次のように結論づける。「古典主義時代のすべての言説を組織しているのは、まさに〈名〉である。話す *parler* なり書く *écrire* なりすることは、ものごとを述べたり *dire les choses* 自己を表現したりすることではない。それは、命名という至上の行為へと進むこと、事物と語とが共通の本質の中で結ばれる場所、したがって事物に名を与える *donner un nom* ことが可能になる場所まで、言語を通じて赴くことなのだ」（*ibid.*）。

#### 終局の順延

だが、フーコーによれば、至上の行為を前にして一つの逆転現象が生じるであろう。彼は言う。「だが、こうした〔完全な〕名がひとたび言表されるや、そこまで導いてきたすべての言語（…）はこの名の内に解消して消滅する。したがって、古典主義時代の言説は、その深い本質においてつねに〔完全な名の体系という〕こうした極限へと向かいながら、まさにその極限を後退させる *reculer* ことによるのみ存立している。（…）それゆえ、言説は〔完全な名を求めて歩むが〕、その可能性そのものにおいて、修辞学に結びつく。——修辞学、すなわち、名

をその表象しているもののまわりに振動させ *faire osciller*、その名指しているものの要素、隣接物、類比物を出現させる、あの空間全体、に結びつく。言説が横切っていくさまざまな比喻形象は、(…) 最後にはそれらをみだし、かつ廃滅させてしまう名が遅延 *retard* するように〔名がすぐにはやってこないように〕している。名は言説の〈終わり〉なのである」(MC, p. 133, J, p. 144)。

まず、「要素、隣接物、類比物」について確認しておけば、本論文 p. 23-26において見たように、これらはウォーバートン、コンディヤック、デュマルセから抽出され、一つの語の意味が、名指しの対象からこれらのものへと修辭的に拡張されることで、意味の派生が進行していくとされたのであった。

さて、この箇所でも論じられる、名あるいは名の体系という極限の順延に関しては、デリダが『たわいなさの考古学』の末尾部分で、コンディヤックに関連して述べたことが思い起こされる。デリダとフーコーは、表現には差が見られるものの、同様のことがらを語っていると思われる。デリダは次のように語っている。記号はいつも拡張によって、いたずらに作動する可能性がある。しかし、人間は記号のたわいない空転に抗して、再び、記号の頑固な自同性、正当性それ自体を生み出し始める<sup>(6)</sup>。つまり、デリダは記号の比喻的使用、拡張の動きの中に、それに抗する、記号の固定化の傾向を見てとる。一方、フーコーは、名の完成を求める傾向の中に、不可避的な比喻の運動も同時に見るのである。二人は共に、固定化と流動の二つの傾向の交点に人間存在を見ていることになる。ただし、フーコーもデリダも、コンディヤックなり他の論者なりからの引用に基づいて、こうした見方を立てているわけではない。いずれにせよ、この見方は、人間についての二人の総体的な認識を示していると考えられる。

### 文学の行方

さて、フーコーの見るところ、名への到達はつねに順延されるが、名へ向かう傾向自体は維持されている。そこから、フーコーは続けて次のように語る。「古典主義時代の文学全体は、〈名の比喻形象から名それ自体へ〉と向かう運動の中に宿っている。この運動は、〈同じものをさらに新たな比喻形象によって名指す〉という任務（それがプレシオジテ<sup>(7)</sup>である）から、〈それまでけっして名指されたことのないもの、あるいは遠い語の襲の中に眠っていたものを、ついに正当となった語によって名指す〉という任務へと向かう。これら名指すべきものは、魂のもろもろの秘密であり、事物と身体との境界で生れるあの諸印象であり、これらのものに対して〔ルソーの『孤独な散歩者の夢想』の〕「第五の散歩 *Cinquième Promenade*」<sup>(8)</sup>の言語はおのずから透明となったのである」(MC, p. 134, J, p. 144-145)。

実際、ルソーは「第五の散歩」で、サン＝ピエール島の自然の中での生活における、何を考えるでもない「夢想」状態の中で感じられる、魂を充足させる心地よい存在感、さらには、鳥を離れた後、今は眼前にない魅惑的なものの姿を思い起こしつつなされる、いわば鳥にいたときのものにまさる「夢想」とそこでの幸福感を、言語によってできる限りありのままに伝えよ

うとした<sup>(9)</sup>。つまり、「諸印象」や、そうした印象を含む「魂のもろもろの秘密」を対象化して名指し、何も阻害しない「透明」な言語によってそのまま表象し、伝達しようとした。結局、文学においては、単なる表現の洗練から、新たに対象化された印象を名指すことへと向かう運動が存在したとされる。

なお、ここでは言及されないが、並行して諸学——とりわけ自然科学、生命科学——においても、おそらくは文学よりやや遅れて、新たな認識対象にかかわる新たな観念の形成とその命名へと向かう運動があったのではなからうか。つまり、諸学においても、認識対象に対して透明な言語が目指されることになったのではなからうか。この運動を、フーコーは、『言葉と物』に先行する『臨床医学の誕生』において展開したのだと思われる。

文学においては、ロマン主義がやがて「事物をその名によって名指すことを知った」と信じるであろうが、実際には古典主義がすでに「そのことへと向っていた」のである (MC, p. 134, J, p. 145)。だが、フーコーによれば、文学の運動はここで終わらない。

「しかし、まさにそのこと〔名指しへの運動〕によって、名は〔単に〕言語の報酬〔＝目的〕であることをやめ、その謎めいた素材へと変化する。名が言語の成就であると同時に実体であり、約束されたものであると同時に生の素材でもあった唯一の瞬間——それは許しがたい瞬間であった——は、サドとともに言語がその全域にわたって欲望につらぬかれたときであった。言語は欲望の出現の場、欲望の充足、欲望の無数の繰り返し recommencement indéfini となった。それゆえ、われわれの文化の中で、サドの作品はたえざる本源的つぶやきとしての役割を演じている」(ibid.)。

ここでは、言語において欲望が出現し、充足され、繰り返すとされ、名はそうした言語の素材ないし実体となったとされる。名がいまだ目的であった時代に、名を実体としたことで、サドは「唯一」の存在とされるのであろう。また、フーコーは、少し前で『ジュリエット』<sup>(10)</sup>を例に引き、「命名行為をそれまで延期させてきた修辞法の比喩形象は」「欲望の無数の比喩形象となり」、また、「さまざまな同じ名がつねに反復されて、欲望の無数の比喩形象を踏破し parcourir〔＝まとめて充足させ〕ようとむなしく努力する」(MC, p. 134, J, p. 144)としている。欲望は比喩形象を通じて名そのものに向かい、名はその欲望を満たそうとするが、欲望は結局繰り返されることになる。実際、『ジュリエット』において、欲望は、言語の形をとって、感覚や情念から哲学的観念までを含むあらゆる表象へと向かい、際限なく繰り返されるのである。

さて、ここでもデリダによるコンディヤックに関連した指摘が思い起こされる。デリダは、『たわいなさの考古学』の先にふれたのと同じ部分で、『動物論 *Traité des animaux*』(1755)におけるコンディヤックの次のような記述を援用している。「一つの欲望が満たされるやいなや私たちは他の欲望を作り上げる。しばしば私たちは同時にいくつもの欲望に従う。(…)私たちはもはや欲望するためにだけ、欲望する限りでだけ生きるのである」<sup>(11)</sup>。欲望の問題につい

てフーコーがコンディヤックを援用することはないが、私たちはここでもコンディヤックの慧眼に瞠目することになる<sup>(12)</sup>。コンディヤックが語っているのは欲望一般の反復であるが、それを言語の領域において示したのがサドであることになろう。

一方、フーコーは次のように文学の行方を描き出すことになる。「[サドとともに] ついにそれ自体のために発音された名〔＝名詞〕のこの暴力によって、言語は事物としての兇暴な姿をあらわにする。その他の「品詞」も自律性をおびる。(…) 言語を名の周辺、名の縁に「引きとめ」、名の〔直接に〕言い表さぬ *ne pas dire* ものを〔比喩的に〕表示させることにはもはや特異な美がない以上、ここに、言語をその生のままの存在において顕示する役割をもった、言説的でない言説が生まれるであろう。(…) [言語の] この存在を存在それ自体のために解き放つ〔言説的でない〕言説こそ、〔十九世紀の〕文学にほかならない」(MC, p. 134, J, p. 145)。

\* \* \*

『言葉と物』第四章第七節「言語の四辺形」は、つまり第四章「語ること」全体も、いまや終極を迎える。

「古典主義時代における名のこうした特確的地位のまわりで、理論上の(…) この四辺形は、(…) 言語がその外部にある不可欠なものとのように絡みあっているかを示している。(…) 命題の形式は、言語の条件として、同一もしくは差異の関係の肯定を定立する。(…) 他の三つの理論的線分は異なった要請を含んでいる。すなわち、語の起源から派生が起り、ある語根が起源においてすでにその意味を指示し、さらに表象の分節化が生じるためには、すでにもっとも直接的な経験において、事物同士の類似関係のつぶやき、最初から与えられている類似がなければならないのである」(MC, p. 134-135, J, p. 145-146)。

こうした類似については、本論文（上）第5節以下（p. 21-）ですでに検討した。古典主義時代の言語がもった「強固で緊密な統一性」(MC, p. 135, J, p. 146) は、結局、この類似にかかわる。「言語とは、<分節された指示の働きによって、類似を命題的關係の中におさめるもの>である。つまり、<同一性と差異の体系——これは〈ある〉という動詞によって基盤を与えられ、〈名〉の綱目によって顕示される——の中におさめる〉のだ。古典主義時代における「言説」の基本的任務は、〈諸事物に名を付与し *attribuer un nom aux choses*〉〈その名において諸事物の存在を名指す *nommer leur être*〉ことである。二世紀にわたって西欧の言説は存在論の場であった。その言説があらゆる一般的表象の存在を名指すとき、その言説は哲学、つまり認識の理論と諸観念の分析であった。その言説が表象された個々の事物 *chaque chose représentée* に適切な名を付与し、表象の場全域にわたって「よくできた言語」の綱目を張りめぐらすとき、名称体系と分類法であった」(MC, p. 135-136, J, p. 146-147)。

「諸事物の存在を名指す」、「あらゆる一般的表象の存在を名指す」と言われているように、言説が名指すのは<諸事物の表象の存在>なのである。存在については、すでに本論文 II-3-

(1)「動詞の理論」中の「表象の實在的関係の肯定」の項でふれた。なお、引用中で「表象された個々の事物」は、具体的な個物ではなく、一つの性質を共有する一般的事物＝表象を指しているとして理解した方がよいと思われる。

\* \* \*

本論文は『言葉と物』におけるコンディヤック理解を三回にわたって検討する予定であり、今回の「下」においては、第六章「交換すること」を扱う。

## 略号

- MC : Foucault, Michel, *Les mots et les choses — une archéologie des sciences humaines*, Gallimard, 1966. (フーコー『言葉と物——人文科学の考古学』、新潮社、1974)
- EOC : Condillac, *Essai sur l'origine des connaissances humaine* [コンディヤック『人間知識起源論』], 1746. (邦訳『人間認識起源論』、岩波文庫、1994)
- G : Condillac, *Grammaire* [コンディヤック『文法』], 1775.
- OP : *Oeuvres philosophiques de Condillac* [『コンディヤック哲学著作集』], éd. par Le Roy, 3 vol., 1947.

## 注

- \* 文献の略号は上の略号欄、書誌情報は末尾の文献欄を参照されたい。
- \* 引用文あるいは本文・注における〈 〉や下線は理解の便を図って筆者が補った。
- \* 引用文中の〔 〕内の記述は訳者による補足である。
- \* 一般に、理解の便を図って筆者が符号・番号等を付け加えた場合は適宜注記した。
- \* 『言葉と物』の訳文中の〈 〉はイタリック体の語または大文字ではじまる語を示す。

## II.

### 1. 言説に対する批判的態度

- (1) 意味作用については本論文(上) p. 19-20を参照のこと。
- (2) フーコーとコンディヤックの反省の概念については本論文 p. 4を参照されたい。なお、フーコーのここでの展開に関連して、コンディヤックの次の記述は興味深い。「彼ら〔獣のような他の諸存在〕にとって知覚でしかないものが、私たち〔人間〕にとっては観念になるのだが、それは、その知覚が何かを表象している représenter、という私たちの反省を通してなのである」(EOC, I-III-16)。  
 なお、『人間知識起源論』への指示は、ローマ数字で順に篇 (partie)、部 (section)、章 (chapitre)、最後にアラビア数字でパラグラフを示す(邦訳では、同じ区分を順に部、章、節としている)。ちなみに、上の引用箇所第一篇第三部は章分けがされていない。
- (3) 記号自体については次のように語られる。「自らを二重化する se dédoubler (...) 表象のはたらきによらなければ、いかなる記号も出現せず、(...) いかなる語も命題もけってどのような内容をも目指しはしないのである」(MC, p. 92, J, p. 102)。表象の「二重化」とは、表象空間の一部をなす記号において、記号自体の観念と記号によって表象されるものの観念が二重になっていることを言う。これについては、本論文(上) I-4を参照のこと。この考え方はフーコーが『ポール・ロワイヤル論理学』から読み取ったものである。コンディヤック自身が表象の二重化のような考え方をどこまでもっていたかの検討は本論文ではなしえない。なお、コンディヤックも「表象する représenter」という語を使うが、『人間知識起源論』

(1746)においては、一般的なく人あるいは事物が何かを表す>といった用法、あるいは、せいぜい<知覚 (前注参照)、観念 *idée* ないし概念 *notion*、あるいは絵文字が事物を表象する>といった用法に限られ、記号一般についてこの用語が用いられることはない。しかし、『文法』(1775)では、<人が事物を……として表象する> (Cf. G, I-XIII, II-XII [ローマ数字は順に「部」、「章」を示す])、さらには、<人為的言語、名詞、語、言説、音、命題、用語、形容詞など、つまりは記号が事物や観念を表象する>という表現が認められる (Cf. G, I-II, IV, VIII, XIV, XIV, XXI)。

- (4) 他方、ルネサンス期には、言語は世界のなかに事物と混じり合って存在し、人はその言語を語らせるために、注釈として二次的言語を生み出した、とされる (MC, p. 93, J, p. 103)。
- (5) フーコーは、十九世紀になると形式と内容は対立するようになるという。この対立の一端は、本論文 II-3 の「(2) 分節化」でふれる、微細語の機能についての一方の解釈 (<1>) に顔をのぞかせるように思われる (本論文 p. 16 の本文および (注 4) を参照のこと)。
- (6) 本論文では紙幅の関係でコンディヤックの「よくできた言語」について論じることはできない。拙論「フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック」の p. 10-11, p. 25-26 (=注 II-13後半部分)、および「フーコー『言葉と物』におけるコンディヤック (上)」の p. 17で、この概念のやや詳しい紹介を行っている。また、本論文の p. 33 (下部) も参照されたい。なお、「よくできた言語」は、コンディヤック最後の著作『計算の言語』にも現れるが、そこでは代数学がその「唯一」の例であるように語られるに至る。こうしたことの検討は別の機会に譲りたい。
- (7) フーコーはこの一般文法の問題設定を次のように表現している。「言語は曲用をもつ場合と前置詞の体系をもつ場合とどちらが完成されたものであるのか? 語順は自由であるのと厳密に決定されているのとどちらが望ましいのか? 継起関係をもっともよく表現する時制体系とはいかなるものか? 等々」(MC, p. 94, J, p. 104-105)。
- (8) -age は生成物を表す語尾であり、*langage* は *langue* (舌) による生成物としての言語活動ないし言語を示す。本論文ではこの語を言語活動、言語と適宜訳し分ける。一方、*langue* (言語) は言語規範の体系を指す。『言葉と物』の邦訳においては、*langage* と *langue* をどちらも言語と訳した上で、それぞれの発音をルビとしてふって区別している。
- (9) フーコーによれば、批判 *critique* は、i. 表象と ii. 真実性の用語で言語について語ることで、言語を冒瀆する面がある。一方、ルネサンス期に見られた注釈 *commentaire* という態度は言語を神聖化する。言語が自己と関係する際の a. 注釈と b. 批判という二つの仕方は、古典主義時代以後互いに拮抗することとなり、この拮抗はおそらく今日もおそらく日々強まりつつあるという (Cf. MC, p. 95, J, p. 105)。すなわち、マラルメ以来、文学は、その存在自体における言語に再び接近を続け、そうすることで、もはや b. 批判ではなく a. 注釈の形をとる二次的言語を誘発しているという。しかし、私たちの文化においては、言語の表象にたいする古典主義時代的な依存も続いており、あらゆる二次的言語は b. 批判か a. 注釈かの二者択一を迫られるであろう。

## 2. 一般文法

- (1) ここで、「<言説>とは、言語記号 *signes verbaux* によって表象された表象作用そのもの」であるとされる。なお、個々の言説はある具体的な表象内容を伴うであろう。
- (2) 『言葉と物』でのコンディヤックの著作の参照箇所の指示には、*Œuvres de Condillac* [コンディヤック著作集], Houel, Paris, 1798 が用いられている (この著作集については、拙論「フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック」の注 II-(4) を参照のこと)。本論文でコンディヤックの『文法』を指示する場合、著作名を略号 G で示し、ローマ数字で「部」、「章」などの区分を補った上で、ページ数を掲げる。さらに、読者の参照の便を考え、ルロワ Le Roy 版著作集 (本論文 (上) の参考文献欄参照) の巻、ページ、左欄 (a) / 右欄 (b) を [OP1, p. --- a(b)] のように併記する。
- (3) フーコーは数行先でコンディヤックの次の記述も短縮して紹介している。「精神は判断するすべての観念 [= 表象の諸要素] を同時に知覚する。それらの観念を知覚するままに発音することができるなら、精神はそれらをすべて同時に発音するだろう。これが精神にとって自然なことであり、行動言語 *langage d'action* しか知らないとき、精神はこのように語っているのである」(G, [II-XXVII] p. 336 [OP1,

- p. 503a]). コンディヤックは身体の動作、叫びなどからなる *langage d'action* を人間の言語の原初の形と考えた。この言語が叫びなどを含むことから、本論文では「行動言語」と訳す。コンディヤック『論理学』の訳者山口裕之氏がこの訳語が用いていることも参考にした。
- (4) 自然的言語とは行動言語を指すと思われる。
  - (5) フーコーは続けて、「観念学」を唱えたデステュット『観念学要綱』Destutt de Tracy, *Éléments d'Idéologie*, 1801-1815からも引用しているが、本論文では立ち入ることはできない。
  - (6) フーコーはこの能力の先に当時の百科事典の試みを見ている。
  - (7) Goetz, Rose も十八世紀に「論理学が言語研究に帰せられる」傾向があったとしている (Destutt de Tracy, 1993, p. 141)。しかし、Goetz もなぜか典拠は示していない。論理学と文法の関係については、中川久定「十八世紀フランスの言語論」第一節「十八世紀の言語論の前提」も参照のこと。
  - (8) フーコーは、「ここから、言語を手がかりとして自由と奴隷制度の歴史——古代ギリシャと絶対王政期のフランスの歴史——「を書く可能性が生じる」とし、ルソー『言語起源論』(1762年前半頃までの執筆、著者の死後1781年の出版)の最終第20章「言語と政体の関係」の参照を求めている。
  - (9) フーコーによると、「やがて十九世紀は、この相互依存関係を解消し、一方には自らの上に閉ざされた知を、他方にはその存在と機能において謎めいたものとなった純粋な言語——この時代以後〈文学〉と呼ばれるようになる何ものか——を、互いに対立するまま放置するであろう。そして両者のあいだに、知と作品〔純粋言語、文学〕の双方から派生した(…)中間的言語が際限なく展開されることであろう」(MC, p. 103, J, p. 114)。
  - (10) フーコーによれば、古典主義時代は、さまざまな言語の年代的系譜に関心を示さなかった。この系譜は十六世紀には実在したし、十九世紀に再び現れることになる、とされる。
  - (11) 「反省的な秩序」が時間的に遅れて生じると見なされるのは、この秩序が論理的に後に来るからであろう。他方、「諸言語の歴史そのものについていえば、それはもはや風化、偶発事、諸要素の移入、遭遇、混交にすぎぬ。(…)諸言語は発展のいかなる内的原理にもしたがわれない」(MC, p. 105, J, p. 115-116)。
  - (12) フーコーは補足的に次のように語っている。「[ただし、]一般文法は、(…)個々の言語を、思考のそれ自身に対する分節化 *articulation* の一様態と見なして、順次扱うことを目指している」(MC, p. 106, J, p. 116)。結局、「言語による分節化にはいくつもの種類がありうる以上、各言語の一般文法がありうる」、とフーコーはするのである (ibid.)。この点に関連して、フーコーはビュフィエ Buffier、ティエポー-Thiébaud といった名前を挙げている。ここで語られる「各言語の一般文法」とは、先にコンディヤックについて見た「個別文法」(本論文 p. 5) に近いものと思われるが、この点の検討は本論文ではなしえない。
  - (13) ここで「すべり」と訳す原語は *glissement* (動詞形は *glisser*) であり、基本的に「滑る」という動作を意味している。邦訳は「変位」と訳しているが、特に位置の変化に着目する語ではない。一方、「派生」と訳す原語は *dérivation* (動詞形は *dériver*) であり、元のものから分かれていく動作を基本的な意味としている。邦訳は「転移」と訳しているが、派生が生じた元のものが元の位置に残ることを妨げず、「移動」していくという意味ではない。なお、この語は言語学では「語の派生」を意味するが、『言葉と物』では、むしろ「意味の派生」を意味している。

### 3. 一般文法の検討

#### (1) 動詞の理論

- (1) 論者によって「述辞 *prédicat*」、「繫辞 *coplule*」といった用語も使われるという。
- (2) 原注には「『ポール・ロワイヤル論理学』p. 106-107」とある。版は明示されていないが、内容と指示されるページが一致するのは次の版である。*Logique de Port-Royal*, introduction par P. Roubinet, Lille, 1964 (réimpression de l'édition de 1683).
- (3) *Je suis parlant*. の文においては *parlant* (話している、という形容詞) が属辞となる。
- (4) フーコーはここに、コンディヤックについて今しがた見たような、一般動詞は〈ある〉という動詞を含む文に対応しているという説明を挿入している。
- (5) 当該箇所ではコンディヤックはフランス語の時制の体系を分析しており、フーコーのように動詞の時制を抽象的に論じているわけではない。フーコーの主張は、あくまでもコンディヤックの時制の分析を解釈した

ものである。

- (6) コンディヤックが表象の「存在」をどう考えていたかはさらに考察できようが、機会をあらためなければならぬ。EOC, I-V-9; G, I-IV, p. 46- [OP1, p. 437a-]; G, I-XIII, p. 131- [OP1, p. 456a-] などにおける記述を手がかりにあらためて検討することができよう。
- (7) このコンディヤックの記述を引き合いに、ディドロがその『盲人書簡』(1749) で、この著作の感覚論思想に「独我論」の嫌疑をかけたことはよく知られている。

## (2) 分節化

- (1) ただし、コンディヤックは *articulation* [分節化]、*articular* [分節する] という単語を発音について使うことはあるものの、フーコーのように語の相互関係について使うことはない。
- (2) コンディヤックが形容詞とするものには、フランス語の冠詞も含まれる。たとえば、定冠詞は実詞の内容を一般的に扱うよう求めるという (G, II-II, p. 158 [OP1, p. 463b])。また、普通名詞や固有名詞は実名詞 *nom substantif*、形容詞は形容名詞 *nom adjectif* とも言われる。
- (3) 「二重化された表象」については、本論文 (上) p. 18-21 を参照のこと。
- (4) フーコーによれば、こうしてボーゼ *Beauzée* 以来、補語 *complément* と従属関係 *subordination* の理論が重視される。そして、世紀末にいたって、シカール *Sicard* とシルヴェストル・ド・サシ *Sylvestre de Saci* によって、命題の ii. 論理的分析と文の i. 文法的分析とが区別され、文法的なものの自律性が確定したとされる。
- (5) このあたりの展開は、原注で示されるように、バトゥー *Batteux* の著作に依拠しているが、本論文では立ち入ることはできない。
- (6) 形容名詞 *nom adjectif* と〈ある〉という動詞が結合して動詞となり、身振りを表わす名詞が固定して接続詞と前置詞となり、他の語に吸収された名詞が曲用と活用である、という。
- (7) ル・ベル *Le Bel, Jean Louis* 『ラテン語解剖 *Anatomie de la langue latine*』(1764)。
- (8) この原注でのページの指示は、おおむね『言語起源論』の第一章、第二章、第九章の末尾の2パラグラフ、第十章に対応しているようだ (フーコーの指示は、理由はわからないが、この著作の当該の版の章立てとやはずれが見られる)。私が本文でまとめるような展開は、これらの箇所からもほぼ把握することができよう。
- (9) *langage d'action* を「行動言語」と訳すことについては、本論文 II-2 (注3) を参照。
- (10) 無意味な音節に見える場所に、休止した何らかの命名が存在し、不可視の表象を反映させる音声形象が存在している——こう感じる言語経験は、まず秘教的で神秘的なかたちをとり、次いで、マラルメらとともに文学的なかたちをとったという。私たちがまた、文学が成立するあの果てしないつぶやきのなかで語ることができるかとされている。

## (3) 指示

- (1) コンディヤックにおける行動言語 (動作言語) の成立をめぐる議論については、拙論「フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック」p. 4-7も参照のこと。
- (2) 前注で掲げた個所を参照のこと。
- (3) フーコーはここでさらに、人間は言語を授かったとする、『人間不平等起源論』の時点におけるルソーの仮定と、行動言語を立ててそうした仮定を回避したコンディヤックの主張に簡単にふれている。この問題は比較的知られているが、本論文では立ち入ることはできない。
- (4) フーコーは関連して、言語の発展について次のようにも語っている。「われわれの身体を通して自然発生的に生れる〔行動言語の〕諸記号〔の間〕にはいかなる類似もない。(…)〔人為的言語が発展する段階で、人々の〕反省は〔自然の中に〕いろいろな類似を発見し分析し発展させる。(…)〔この〕第二の段階で恣意性が排除されるが、分析へと開かれることになる道はすべての人間、すべての国民において正確に重なりあうものではないだろう」(MC, p. 122, J, p. 133)。人は、自然の事物に類似を発見し、さらに、事物に対応する言語記号を類似に基づいて形成し発展させるであろう。ただし、言語記号の発展は「すべての国民」に共通なわけではないとされる。
- (5) 「原初の語根から遠ざかれば遠ざかるほど、(…)言語は複雑となり、しかもおそらくは新しいものとなるわけだが、同時にその場合、語は表象の分析のためにより有効で精緻なものとなるであろう」(MC,

p. 124, J, p. 135)。このようにフーコーは、当時の認識論的な楽天主義を代弁している。

#### (4) 派生 *dérivation*

- (1) <分析すべき表象(や思考)>と<語(言語)およびその分節化>との関係については本論文 p. 3-4 「言語の特徴」、p. 9 「一般文法の認識論的な場」、p. 15-16 「表象と言語」などの項を参照のこと。
- (2) この問題は、デリダがコンディヤック論『たわいなさの考古学』(1973)の第5章「たわいなさそれ自体」において、コンディヤックに関して提起した問題と同様のものである。Jacques Derrida, *L'archéologie du frivole*, Galilée, (1973) 1990, p. 121-146 [『たわいなさの考古学』、人文書院、2006、p. 109-135]。拙論「デリダのコンディヤック論」(名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第28巻第1号、2006年) p. 12-14も参照のこと。
- (3) Warburton, *Essai sur les hiéroglyphes Égyptiens* (仏訳、1744), 1ère partie, §3, p. 19-23. フーコーはこの部分の出典を明示していないが、この部分の前後でウォーバートンが引かれている。なお、フーコーは、文字表記が表象した対象として事物の要素、状況、類似物を挙げているが、これらの対象は、ウォーバートンの実際の記述とは表現にずれが見られる。
- (4) フーコーはウォーバートンにならって、こうした比喩的な指示として、弓が戦いを表し、眼が全知全能の神を表し、頭から飛び出すワニの目が昇る太陽を表すことなどを例示している。
- (5) なお、象形文字に起源の一つをもつ漢字は、「音符」をもつことで、本来(中国語として)、音と「内在的關係」をもつと言え、音声中心主義の主張とまったく対立するものではなからう。
- (6) 『文法』第一部第二章においては次のように展開される(G, [I-II] p. 21-33 [OP1, p. 431b-434b])。人間の体は分節音言語を話すようにできている。分節音言語の語は行動言語の延長上にあり、恣意的に選び取られるのではない。諸感覚と聴覚との「類比 analogie」を基礎に、さまざまな音が実際の各種の感覚の記号として選ばれる。個々の感覚的性質を表す音を要素として組み合わせて新語を作り、それによって、複数の感覚的性質を有する現実の事物を名指すことができる。ただし、原初の名詞は事物の本性を表示したわけではない。言語は、私たちの知識の体系を模倣した体系を作り上げる。必要、知識、言語は相互につきあう。あらゆる言語は同じ基礎の上に成立している。しかし、各言語はその広がりにおいて相互に異なる。
- (7) 「すべり」については、本論文 II-2 (注13)を参照されたい。
- (8) *dérive* (漂流)は、この節のタイトルである *dérivation* (派生)とは語源を異にする。
- (9) コンディヤック『人間知識起源論』における、記憶や想像の問題については、拙論「初期コンディヤックにおける人間精神の高次の機能の素描」(名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第35巻第1号、2013)を参照のこと。
- (10) デュマルセ『比喩論』Du Marsais, *Traité des tropes*, 1730. 第三章第二節「さまざまな比喩の間の関係について」の中の *catachrèse* [濫喩、転化表現]についての説明で、「葉」の例が挙げられる。
- (11) フーコーはここで、ルソー『言語起源論』における、原初の人には出会う他人たちを強大であると感じ、「巨人」という比喩的なことばをまず生み出した、という議論などを引いている。
- (12) Derrida, op. cit., p. 143-144 [デリダ、上掲書、p. 131-132]。拙論「デリダのコンディヤック論」(上掲)、p. 13-14も参照のこと。

#### 4. 言語の四辺形

- (1) フーコーが、『言葉と物』の第一部の末尾に付けた、古典主義時代のエピステーメーを示す図では、四辺形の四つの線分はそれぞれベクトル(矢印)の形にされている。
- (2) フーコーは、他にマルブランシュ、パークリー、ヒュームの名を上げている。
- (3) シルヴァン・オールー-Sylvain Auroux は『哲学者辞典 *Dictionnaire des philosophes*』の« Condillac »の項でこうした主張をしている。なお、一般的に言って、普遍的なものが実在するとする実念論、普遍的なものは単なる名辞であるとする唯名論の両者に対して、「概念論 *conceptualisme*」においては、普遍的なものは概念としてあり、その実在性は概念の妥当する個的存在に依存するとされる。
- (4) たとえば次のような記述がある。「抽象的で一般的な観念とは名称 *dénomination* にすぎない」(『論理学』第II部第V章)。「もし抽象観念が名前とは他のものであると思うなら、その他のものが何であるか言ってほしい」(『計算の言語』第I篇第IV章)。

- (5) ルソーは晩年の著作『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く *Rousseau juge de Jean-Jacques*』（1772年～1776年執筆、1782年死後刊行）（ルソー自身も含め『対話 *Dialogues*』と呼びならわす）の「第一対話」の冒頭で、「理想世界」の住人たちを想定する。彼らは、私たちに比べ魂も純粹であり、「感情と思想の表現」もそうした魂の変様の刻印を帯びており、「仲間たちがお互いを識別できる特徴的な記号」となっているとされる（Rousseau, *Rousseau juge de Jean Jaques Dialogues, Oeuvres complètes*, t. 1, Gallimard, p. 672 ; ルソー『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く——対話』、『ルソー全集 第三巻』、白水社、p. 24）。
- (6) Derrida, op. cit., p. 146. [デリダ、上掲書、p. 134-135.]
- (7) プレシオジテ 17世紀前半のフランス文学において、言語表現の洗練を目指した風潮。通常の語を独特の気取った表現に置き換えた。
- (8) Rousseau, *Les reveries du promeneur solitaire, Oeuvres complètes*, t. 1, Gallimard, p. 1040-1049 ; ルソー『孤独な散歩者の夢想』、『ルソー全集 第二巻』、白水社、p. 361-372.
- (9) 「第五の散歩」は『孤独な散歩者の夢想』の中心的部分であり、スイスのビール湖のサン＝ピエール島での生活とその思い出を描いている。
- (10) Sade, *Histoire de Juliette ou Les prospérités du vice, Œuvres complètes du Marquis de Sade, Au Cercle du livre précieux*, t. 8, 1963.
- (11) Derrida, op. cit., p. 146. [デリダ、上掲書、p. 134.]
- (12) 拙論「コンディヤックの動的人間観——欲求の理論とその展開」（名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第33巻第2号、2012年3月）参照。

#### 参考文献（本論文(上)への追加のみ）

- Oeuvres de Condillac*, éd. Arnoux et Mousnier, Houel, Paris, 1798. Tome I : *Essai sur l'origine des connaissances humaines* [人間知識起源論] (初版1746) (邦訳、『人間認識起源論』、岩波文庫、1994) / Tome V : *La Grammaire* [文法] (初版1775)
- Oeuvres philosophiques de Condillac*, éd. Georges Le Roy, P.U.F., Paris, 1948, t. I-IV (ルロワ編『コンディヤック哲学著作集』) Tome II : *La Grammaire* [文法]
- Warburton, *Essai sur les hiéroglyphes des Égyptiens* [エジプト象形文字論], 仏訳, 1744 ; *Essai sur les hiéroglyphes des Égyptiens*, Aubier-Montaigne, 1978.
- Destutt de Tracy, *Projet d'éléments d'idéologie*, Chez Pierre Didot l'aîné, Paris, an IX [1800 or 1801].
- Du Marsais, *Traité des tropes*, 1811 ; Dumarsais, *Des tropes ou des différents sens*, Flammarion, 1988.
- Rousseau, *Essai sur l'origine des langues, Oeuvres complètes*, t. 5, Gallimard, 1995 (ルソー『言語起源論』、『ルソー全集 第11巻』、白水社、1980 ; 岩波文庫、2016)
- Rousseau juge de Jean Jaques Dialogues, Oeuvres complètes*, t. 1, Gallimard, 1959 (ルソー『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く——対話』、『ルソー全集 第3巻』、白水社、1979)
- Les reveries du promeneur solitaire, Oeuvres complètes*, t. 1, Gallimard, 1959 (ルソー『孤独な散歩者の夢想』、『ルソー全集 第2巻』、白水社、1981)
- Sade, *Histoire de Juliette ou Les prospérités du vice, Œuvres complètes du Marquis de Sade, Au Cercle du livre précieux*, t. 8, 1963.

#### 研究

- 中川久定「十八世紀フランスの言語論——コンディヤック、デイドロ、ルソー」、『思想』、岩波書店、1972年2月号。
- Auroux, Sylvain, « Condillac », *Dictionnaire des philosophes*, 2 vol., Presses universitaires de France, 1984.
- Goetz, Rose, *Destutt de Tracy Philosophe du langage et science de l'homme*, Droz, 1993.
- 糟谷啓介「文法と神——一般文法と言語神授説」、『一橋論叢』120(2)、1998.

キーワード：フーコー、コンディヤック、言葉と物、一般文法

## Résumé

Condillac dans *Les mots et les choses* de Michel Foucault (2)

IINO, Kazuo

Le présent article, qui sera publié en trois fois, tente de déterminer la place de Condillac dans *Les mots et les choses* (1966) de Michel Foucault. À la suite de la première partie qui traitait du chapitre III de cet ouvrage, cette deuxième partie examine les mentions de Condillac dans le chapitre IV du même ouvrage. Ce chapitre, intitulé « Parler », est important dans la mesure où il décrit les caractéristiques fondamentales des théories du langage à l'âge classique. Le développement principal de ce chapitre peut être considéré comme une interprétation de la théorie du langage de Condillac. Dans la section I du chapitre IV, intitulée « Critique et commentaire », Foucault énonce qu'à l'âge classique l'attitude des auteurs à l'égard du langage prend la forme d'une critique, tandis qu'au XVII<sup>e</sup> siècle elle relevait du commentaire. La section II du même chapitre, intitulée « La grammaire générale », considère que la « grammaire générale », recherchée par Condillac et ses contemporains, mérite d'être examinée. Foucault se propose d'en examiner quatre éléments dans les sections suivantes. Dans la section III du même chapitre, intitulée « La théorie du verbe », l'auteur estime que la proposition se déploie selon un ordre successif et que le verbe y établit un lien d'attribution reliant les choses représentées. La section IV du même chapitre, intitulée « L'articulation », traite de l'articulation des noms qui « découpe » les généralités et différencie les choses. Dans la section V du même chapitre, intitulée « La désignation », l'auteur montre que la désignation attache un mot radical à une représentation établissant ainsi un lien unique et stable. La section VI du même chapitre, intitulée « La dérivation », estime que, malgré ces liens stables, la dérivation se fait selon des figures spatiales. La section VII du même chapitre, intitulée « Le quadrilatère du langage », examine la réciprocité entre les quatre éléments du langage traités dans les sections précédentes. Enfin, la troisième et dernière partie du présent article examinera les mentions de Condillac dans le chapitre VI de l'ouvrage de Foucault.

Keywords: Foucault, Condillac, *Les mots et les choses*, la grammaire générale